

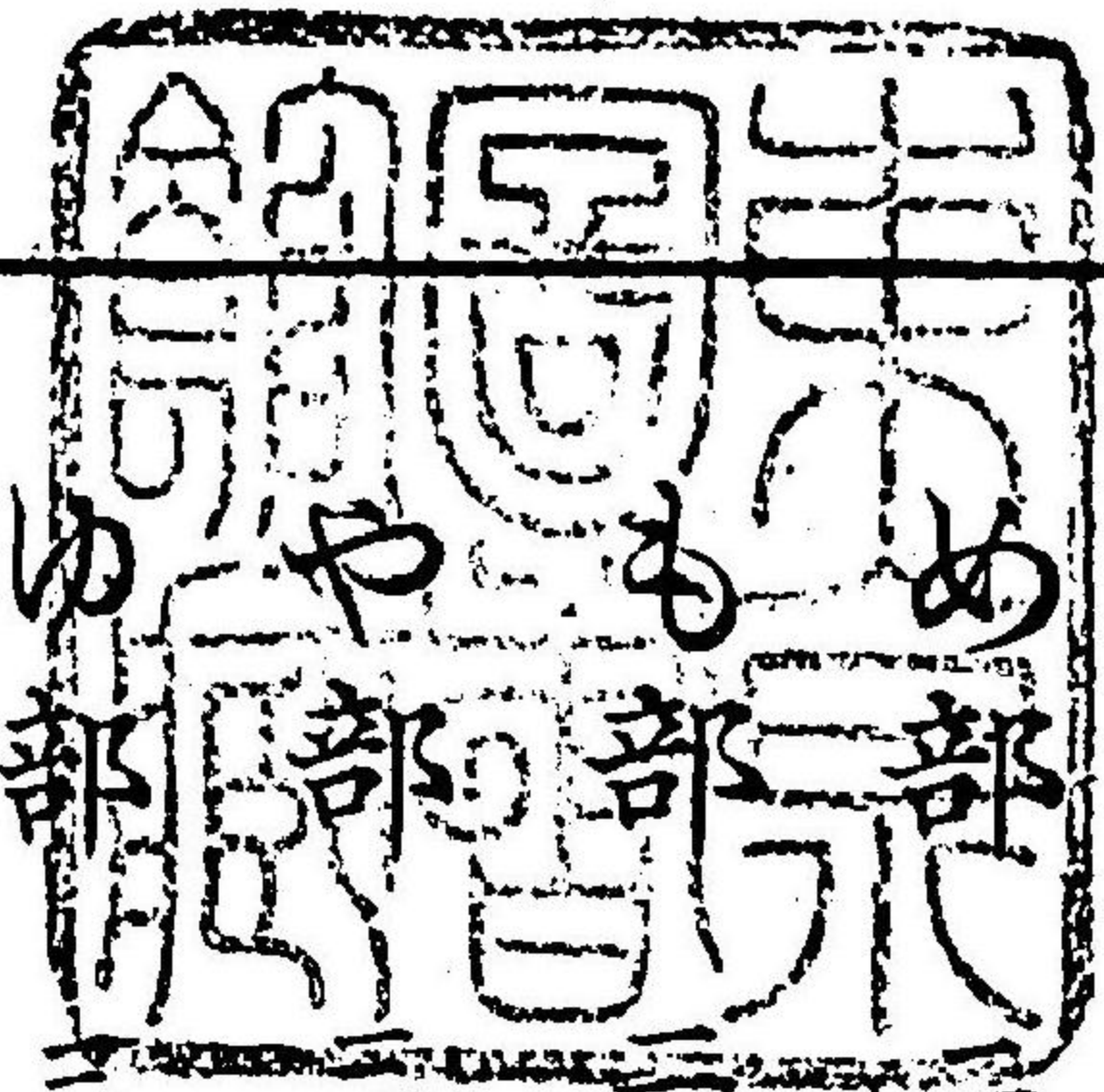
126

79

古言譯通

館書圖京東				
五	七		一	
	九		二	
冊	號	架	函	類門

冬



ま部 初丁

み部 十二丁

む部 十九丁

め部 二十二丁

も部 十七丁

や部 二十一丁

ゆ部 二十五丁

よ部 四十四丁

ら部 五十四丁

り部 五十八丁

る部 五十八丁

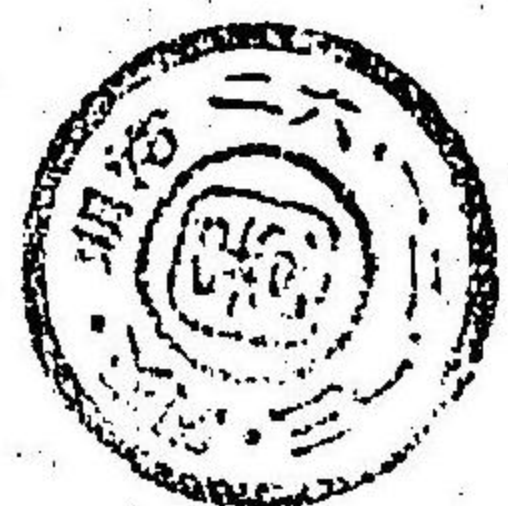
れ部 五十九丁

わ部 六十丁

を部 六十二丁

ゑ部 六十三丁

を部 六十四丁



古言譯通冬

藤原雅澄撰

○まゝ部

まかる シサル

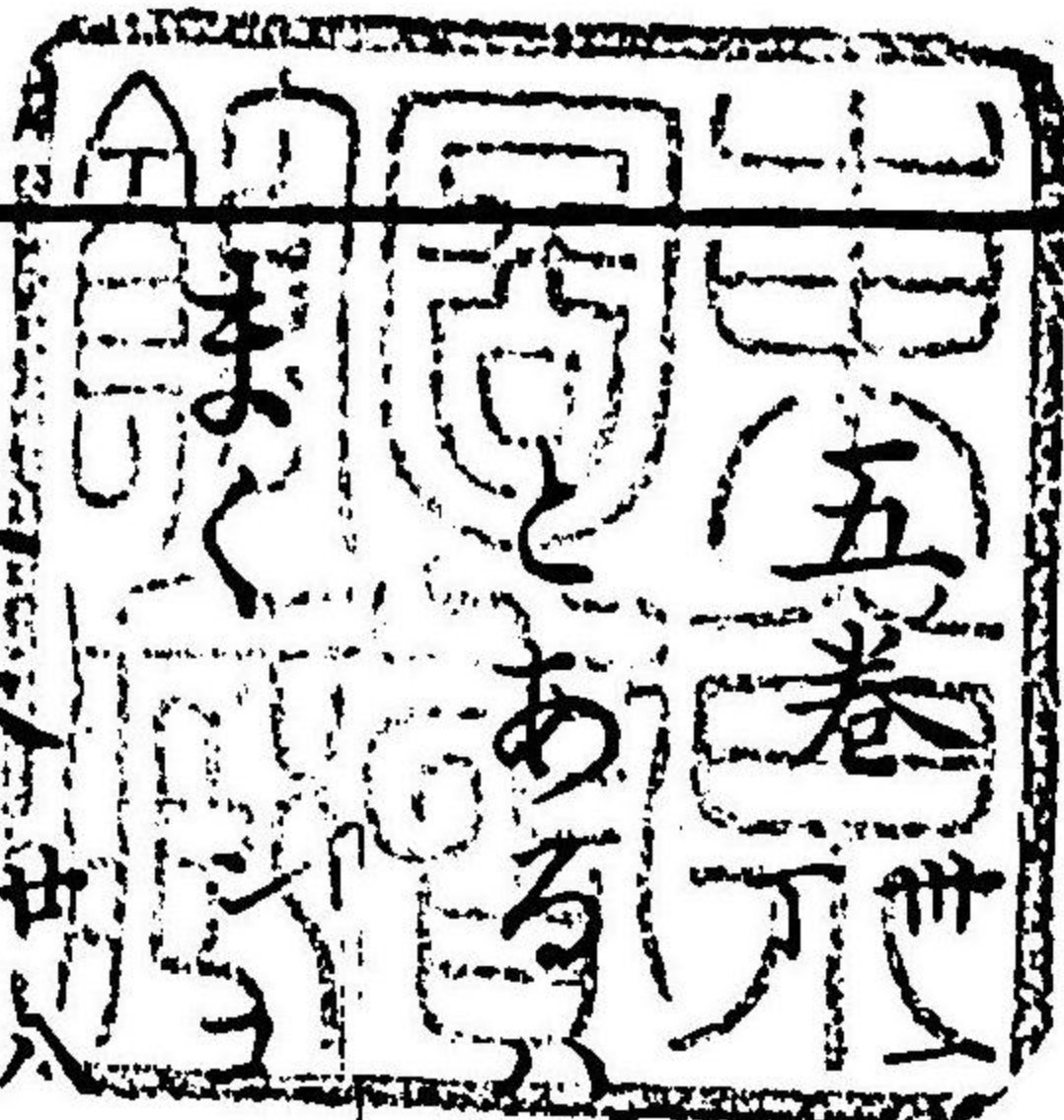
唐能遠境尔都加播佐礼麻加利伊麻勢云々
シサツテ御出ナサルトバと云意あり。

トガ シンコトラ シンコトヨ

二卷 久堅乃天見如久仰見之皇子乃御門之荒卷

惜毛七卷 真珠付越能菅原吾不茹人之茹卷惜菅

原十卷 打細尔鳥者雖不喫繩延守卷欲寸梅花鴨



どあるハ荒ンコトガ川ンコトガマモランコトガと云
意なり。六卷四十。視人乃語丹為者聞人之視卷欲為御
食向味原宮者云く。七卷廿五。欲見戀管待之秋芽子者。
花耳開而不成可毛將有などあるハ。ミンコトヲと云意
なり。同卷十四。時風吹麻久不知阿胡乃海之朝明之塩
尔。玉藻莉奈とあるハ。フカンコトヲと云意なり。又廿玉
津島見之善雲吾無京往而戀慕思者とあるハ。コヒンコ
トヲと云意なり。又君尔戀麻久とやうに結めらむハ
コヒンコトヨと云意よなること。吾戀居久と結めらる
ハ。コヒヲルコトヨと云意なるよ相准べし。

まくの ンコトガ

十卷十五。見渡者春日之野邊尔立霞見卷之欲君之容
儀香九卷十九。問卷乃欲我妹之家乃不知などあるハ。
ミンコトガトハンコトガと云意なり。

まくは ンコトハ ンヤウハ

二卷十二。吾里尔大雪落有大原乃古尔之郷尔落卷者
後とあるハ。フランコトハと云意なり。廿卷五十。字知
比左須美也古乃比等尔都氣麻久波美之比乃其等久安
里等都氣己曾とあるハ。ツゲンコトハ。或ハツゲンヤウ
ハと云意なり。

まくを ンコトヲ

四卷^一五^十丁^一月夜^{ツクヨ}尔^ニ波^ハ門^{カド}尔^ニ立^タ出^デ夕^{トヒ}占^ウ問^ヒ足^ヲト^テ乎^ヲ曾^ソ為^シ之^ヲ行^フ
乎^ヲ欲^ホ焉^リとあるハ、イカ^ンコト^ヲと云意^{ナリ}。八^ハ卷^ニ五^十丁^一。
天^{アマ}霧^ギ之^シ雪^{ユキ}毛^モ零^{ハラ}奴^ヌ可^カ灼^イ然^ク此^{コト}五^イ柴^シ尔^ニ零^{ハラ}卷^マ乎^ヲ將^ミ見^ムとあるハ
フ^ラン^コト^ヲと云意^{ナリ}。

まくも ンコトモ

十^ニ卷^十丁^一吾^ワ屋^ヤ戸^ド之^ノ麻^マ花^ハ押^{オシ}靡^バ置^{オク}露^{ツユ}尔^ニ手^テ觸^フ吾^ワ妹^{イモ}兒^コ落^ケ卷^マ
毛^モ將^ミ見^ム十^ニ卷^十丁^一音^{オト}耳^ミ乎^ヲ聞^キ而^テ哉^ヤ戀^{ユム}犬^マ馬^ソ鏡^{カミ}目^メ直^チ相^ニ而^テ戀^{ユム}
卷^マ大^{オホ}口^{クチ}な^どあるハ、チ^ラン^コト^モコ^ロン^コト^モと云意^{ナリ}。古^コ今^{イマ}集^シい^ざこ^ゝに^ニ我^ガ世^セハ^ハ經^キむ^すが^らや^ふ

一みのさとのあれまくもをしとあるも同じ。

まくに ンコトヂヤニ

七^ニ卷^十丁^一不^タ絶^ズ逝^ス明^ア日^ス香^カ川^ス之^ノ不^ヨ逝^ド有^ラ者^バ故^ユ霜^{シモ}有^ル如^ド人^ト之^ノ
見^ミ國^{クニ}とあるハ、ミ^ンコト^ヂヤ^ニと云意^{ナリ}。を^べて^かく。
け^く。さ^く。あ^く。は^く。ま^く。ら^く。な^どの^ノ類^ルみ^れ同^シ格^ヨ用^ク
辞^ヒよ^て。譯^ル言^ハも^大の^と同^ドさ^まる^り。な^な各^々其^ノ條^キを^照
考^へて^准知^べし。

まく タン子ル クメン 手ニ入ル

七^ニ卷^十丁^一兒^コ等^ラ手^テ乎^ヲ卷^マ向^カ山^{ヤマ}者^ハ常^ツ在^キ常^ト過^ス往^リ人^ト尔^ニ往^キ卷^マ目^メ
八^ハ方^モとあるハ、イ^カヤ^ウニ^タン^子子^テイ^タト^テモ^トテ^モ

タン子得ルコトハアルマイとの謂なり。廿卷五十。山
河乎伊波祢左久美豆布美等保利久尔麻藝之都云云
とあるハ國ヲタン子テ或ハ國ヲクメンシニと云意な
り。日本紀神代下。覓國此云矩貳磨儀とあり。古事記八
千矛神御歌。夜知富許能迦微能美許登波夜斯麻久尔
都麻岐迦泥氏云くとあるも同ト。○古事記神武天皇
條御歌。延袁斯麻加牟とあるハヨイ女ヲ手ニイレウ
との御意なり。

まく○まくらく 枕ニスル

二卷八。如此計戀乍不有者高山之磐根四卷手死奈麻

死物乎とあるハ。磐ヲ枕ニシテと云意なり。同卷四十。
鴨山之磐根之卷有吾乎鴨不知等妹之待乍將有とある
也。磐ヲ枕ニシタと云意なり。五卷十一。伊可尔安良武
日能等伎尔可母許惠之良武比等能比射乃倍和我麻久
良可武十九十四。妹之袖和礼枕可牟河湍尔霧多知和
多礼左欲布氣奴刀尔などあるハ。枕ニ為ウと云意なり。
枕ニシと云意なるを。枕伎枕ニスルと云意なるを。枕久
枕ニシタと云意なるを。枕氣流と云こと。古語の常なり。
獲伎獲久など云と全同格なり。
まぐはー 見アキノナイ

十三^五丁^五己許乎志毛間細美香母挂卷毛文恐山邊乃五
十師^シ乃原^{ハラ}尔内日刺^{ウチヒ}大宮都^{サスオホミヤツカ}可倍^ヘ朝日^{アサヒ}奈須^{ナス}目細^{マクハシ}毛^モ暮^{ユフ}日^ヒ奈
須浦^{スウラグハシモ}細毛云くとある間ハ借字^{マクハシ}よて目細と書るが正字
なりさて細ハその細微^{クハ}しくして絶妙^{ヨキ}を称^{タテ}云ことよて
目細^{マクハシ}ハ見アキノナイと云ことなり古事記^{コトワカ}ニ遠津^{トホツ}年魚^{アユ}
目^メ微^ミ比^ヒ賣^メ日本紀^{ニッポンキ}ニ眼妙^{マクハシ}媛とあるも女の良^{ヨシ}此見あき
のなきを称^ホ美^メとる名なり

まけ 年月 月日 日數

まけハ真來^{マキ}經^キの約^{ヨク}れる詞^{コト}なりけ部考^ベ合^ベべ

まけのまにく オフセ付ラレルマ、ニ サシタテラレルマ、ニ

三卷^三 丁^五 二 物部^{モノベ}乃^ノ臣^{オミ}之^ノ壯士^{ヲトコ}者^ハ大王^{オホキミ}任^{マケ}乃^ノ隨^{マニ}意^ク聞^キ跡^ト云^{イフ}物
曾^ソとあるハオホセ付^{ツケ}ラレルマ、ニと云意^イなり十七^{十七}丁^丁
二 安麻^{アマ}射^サ加流^カ比^ヒ奈^ナ乎^ヲ佐^サ米^メ尔^ニ等^ト大王^{オホキミ}能^ノ麻^マ氣^ケ乃^ノ麻^マ尔^ニ末^マ尔^ニ
出^{イデ}而^テ許^{コシ}之^シ云くとあるハサシタテラレルマ、ニと云意
なり

まこと ホンニ ナルホド シヤウジン オソソレヨ

七卷^七 丁^四 二 淡海^{アヲ}之^ノ哉^ヤ八橋^{ヤハシ}乃^ノ小竹^{コタケ}乎^ヲ不^ヤ造^ハ矢^ツ而^テ信^{コト}有^{アリ}得^エ哉^ヤ
戀^{コヒ}敷^{シキ}鬼^キ乎^ヲとあるハ俗^{ソク}ニホンニアラ^レヤウカと云意^イな
り十五^{十五}丁^丁 二 於^オ毛^モ波^ハ受^ズ母^モ麻^マ許^{コト}等^ト安^ア里^リ夜^エ牟^ム也^ヤ左^サ奴^ヌ流^ル欲^ヨ
能^イ伊^イ米^メ尔^ニ毛^モ伊^イ母^モ我^ガ美^ミ延^エ射^サ良^ラ奈^ナ久^ク尔^ニとあるも同^トト七卷

四十丁。世間者信二代者不往有之過妹尔不相念者とあるハカ子テ世間ハ二代行ト云コトノナイモノヂヤトハ聞テ居タケレド正真ニサヤウノコトモアルカシラ又ト不信用テ居タガセシダツテ死ンダ女房ニニタビヨウアハヌニテ思ヘバナルホドキイタトホリ二代ハイカヌモノデアアルワイと云意なり四卷一丁。吾念如^{アカオモカ}此而不有者玉二毛我真毛妹之手二所纏牟とあるハ正真^シニの意なり八卷四十丁。聞津哉登妹之問勢流雁鳴者^{トハセ}真毛遠雲隱奈利とあるハナルホドともシヤウジンとも譯すべし又オソレヨとも譯すべし

まさきく 息災

二卷^{サニ}丁。磐白乃濱松之枝乎引結真幸有者亦還見六とあるハ息災デアアルナラと云意なり十三丁。言幸真福座跡恙無福座者荒磯浪有毛見登云々志貴島倭國者^{シキ}事靈之所佐國叙真福在與具廿卷十八丁。安騰母比互許^{ヒヒ}藝由久伎美波奈美乃間乎伊由伎佐具久美麻佐吉父母^{サキ}波夜久伊多里豆云々るとあるみな同ト
まさか ソノバ サシアタツタトキ
十一^サ丁。白香付木綿者花物事社者何時之真坂毛常^{サカ}不所忘とあるハソノバデモイツモ忘レラレルト云コ

トハナイ、常ニオモハレルト云意なり。十二十六。梓弓三。
末師不知、雖然真坂者君尔、縁西物乎とあるハ、末カケテ
ノコトマデハシラ子ドモ、只今サシアツツ夕時ハと云
意なり。

まーウ

有麻斯ハアラウ、無良麻斯ハナカラウと云意なり。

ます○いまをゴザル

六、卷廿八。天尔座、月讀壯子、幣者將為、今夜之長者、五百
夜繼許曾とあるハ、俗ニ天ニゴザルと云意なり。五、卷七
都智奈良婆大王伊麻周云く、とある伊麻周も、同じこ

とあり。

ませて○いませで 招待シテ

七、卷廿六。住吉波豆麻君之馬乘衣雜豆臘漢女乎座而
縫衣叙十六。千磐破神尔毛莫負ト部座龜毛莫燒
曾云くなどあるハ、俗ニ招待シテと云意なり。十二十八
十五日、出之月乃高く尔君乎座而何物乎加將念とあ
る、伊麻世氏も同じ。

まーき マヘカド マダソノ時分デモナイ

十九廿五。遙く尔鳴霍公鳥吾屋戸能殖木橘花尔知流
時乎麻多之美伎奈加奈久曾許波不怨云くとある。時乎

招マタシハ排ハ優シのをき
 してと神カミふまれ
 人ヒトふまれその居イ処
 を立タて此コノ方カタは招マタシき
 致イらむるを云イふ
 とありその招マタシき致イ
 らむるよハ或ハハ
 樂ラクままきことハ或ハハ
 笑ウツままきことハ或ハハ
 をしてそれレは愛アイて
 此コノ方カタより來キべき
 事コトをシる
 ありされレハハのハ
 くるハハハハハハハハハ
 詞コトハ或ハハ樂ラクままきこ
 とハ或ハハ笑ウツままきこ
 と云イふそのハハ
 招マタシと云イふをシ活用カクが
 して云イふことハ見
 えりこの例レイよ

麻マ多タ之シ美ミハ、マダ時トキ節セツガマヘカドナユエニ、或ハマダソ
 ノ時トキ分ブンデモナイユエニと云イ意イなり。古コノ今イマ集ツクふ。五イツ月ゲツ來キバ
 鳴ナむふりなむほとゝぎはまよゝきほどの聲コエを聞キむや
 とあるも、マダソノ時トキ分ブンニナラズ、マヘカドノウチニ聲コエ
 が聞キタイとの意イなり。按マふ。麻マ多タ之シ伎キハ、伊イ麻マ陀ダ之シ伎キの伊イ
 を省シきとる言コトと思オモふハ、ひが言コトなり。伊イ麻マ陀ダハ陀ダの言コト濁ダク
 也。麻マ多タ之シ伎キハ多タの言コト清スて、もとより各オノ別オノなり。後ノチ世セ必カナラ伊イ
 麻マ陀ダと云イべき所トコロを、麻マ陀ダと云イることあれど、古コノハなきこ
 となり。そむく麻マ多タ之シ伎キハ、待マツ意イより出デる言コトなりと思オモ
 えるれば、多タの言コトハ必カナラ清スて唱ナゲべきことなり。

りて考カウるに待マツむ
 一ヒトハバニニ
 一ヒトハバニニ
 一ヒトハバニニ

まこす 御待被成 マタツシヤル
 五イツ卷クワン 出イデ豆マメ由ユ伎キ斯シ日ヒ乎カ俗ソク閑ケン都ト家ケ布フくク等ト阿ア
 袁エン麻マ多タ周シュウ良リョウ武ブ知チハ波ハく良リョウ波ハ母モとあるハ、吾ワヲ御待マツナサ
 レルデアラウ、或ハ吾ワヲマタツシヤルデアラウと云イ意イ
 なり。

まづ 一ヒトハバニニ 一ヒトハバニニ
 十ジュウ卷クワン 十三ジュウサン 春ハル去サ先サキ三サン枝シ幸サキ命ノチ在アル後ノチ相ソウ莫ナク戀コヒ吾ワ妹イモ又マタ 十八ジュウハチ 春ハル
 去サレ者バ先サキ鳴ナク鳥トリ乃ノ鷲シユ之シ事コト先サキ立タチ之シ君キミ乎カ之シ將マツ待マツ又マタ 六十ロクジュウ 梅ウメ花ハナ先サキ
 開サク杖チヤウ手テ折オリ而シテ者バ異イ常ジョウ名ナ付ツケ而シテ與ヨソ副ソコ手テ六ロク香カ聞キ廿ニ卷クワン 四十シヨウ 保ホ
 等ト登ト藝ギ須ス麻マ豆マメ奈ナ久ク安ア佐サ氣ケ伊イ可カ尔ニ世セ婆バ和ワ我ガ加カ度ド須ス疑ギ自ジ

可多利都具麻塗などある麻豆ハ俗よ一チバンニ或ハ一チ
バンガケニと云意なり。

まつる ケンジヤウスル

一卷十九 山神乃奉御調等春部者花插頭持秋立者黄
葉加射之云々十六 高杯尔盛机尔立而母尔奉都
也目豆兒乃負父尔獻都也身女兒乃負などあるハ常よ
ケンジヤウスルと云意なり。

まなかひ 目ノサキ

五卷八 宇利波米婆胡藤母意母保由久利波米婆麻斯
提斯農波由伊豆久欲利积多利斯物能曾麻奈迦比尔母

等奈可く利提夜周伊斯奈佐奴とあるハ眼之交の義よ
て俗よ目ノサキと云よ同ト。

まねく シゲウ タビク サイク 數多ウ タント

二卷 眞根久往者人應知云々とあるハシゲウニ
イカバともタビクイカバともサイクイカバともいふ
意よきこえと四卷 如夢所念鴨愛八師君之使
乃麻祢久通者とあるも全同ト一卷 浦佐夫流情
佐麻祢之久堅乃天之四具礼能流相見者とあるハ佐ハ
そへとる言よてニガクシイコ、ロガシゲウナツタと
云意なるべし二卷 日月之數多成塗十七

多麻保許能美知尔伊泥多知和可礼奈婆見奴日佐麻祢
美孤悲思家武可母又四十矢形尾能多可乎尔湏惠美
之麻野尔可良奴日麻祢久都奇曾倍尔家流十八月
可佐祢美奴日佐末祢美故敷流曾良夜湏久之安良祢婆
十九丁十六朝暮尔不闻日麻祢久安麻射可流夷尔之居
者又二十都礼母奈久可礼尔之毛能登人者雖云不相日
麻祢美念曾吾為流これらハ日數多イと云意なり俗
タントといふもあされり。

まひ ケンジヤウモノ

五卷四十和可家礼婆道行之良士末比波世武之多敝

乃使於比豆登保良世六卷二十天尔座月讀壯子幣者
將為今夜乃長者五百夜繼許曾九卷二十霍公鳥を幣
者將為遐莫去十七四十多麻保許能美知能可未多知
麻比波勢牟安賀於毛布伎美乎奈都可之美勢余廿卷十四
五丁和我夜度尔佐家流奈豆之故麻比波勢牟由米波奈
知流奈伊也乎知尔左家などある麻比ハ麻比奈比にて
俗云献上物なり賄賂の字義をのみ云ハ後のことよて
其え鏡梓の類をえとめて絹布或ハ毛の麁物毛の和物
鱈の廣物鱈の狹物甘菜辛菜などよ至るまで神よ供る
物をさして云をえとめて何よまれ尊者よ献るものを

云ことなり。

まみ メモト

七、卷二十五、丁二、大舟乎。荒海ニ尔。擲出ハ八船多氣。吾見之兒等之。
目見者知之母とあるハ。目モトニソレトアラハレタ。と云なるべし。

まむ マウ

將住ハスマウ。將讀ハヨマウ。將忌ハイマウ。將惜ハラシ
マウと云意なり。

まよふ 衣ノ織目ノヨル 衣ノ縫目ノヨル

七、卷二十五、丁二、今年去新島守之麻衣。肩乃間乱者。許誰取見

とある間乱ハ。衣ノ織目。或ハ縫目ノヨルをいふ。集中ノ袖ハまよひぬとも。袂ノ行麻欲比來ヒけり。とよめるな
どみれ同ト。

まをす〇まりを 言上スル ヒキウケテトリマカナウ

十一、丁二、新室。踏静子之手玉。鳴裳玉如所照公乎。内等白
世とあるハ。内へ御入被成ヨト言上セヨト。といふわと
の意なり。古事記仁徳天皇條ノ夜麻志呂能都紀能美
夜迹母能麻袁須阿賀勢能伎美波那美多具麻之母。雄畧
天皇御歌ノ美延斯怒能袁牟漏賀多氣尔志斯布須登多
礼曾意富麻幣尔麻袁須云くなどある。麻袁須ハ。みお尊

所_レ對_テ告_ルことよて、俗_ニ言_ハ上_ルスルといふよあざれり。
志_ルるを後_ニ世_ニ、尊_キ方_ニ對_テ言_ハことを申_スといふいよ
けれども、賤_キ方_ニも對_ヒていふこと、心得_テ申_聞申_シ
付_ルなどさへいふえ、いとくさぐさへることなり。○二卷_三
五_丁、八隅_ノ知_ル之_ハ、吾_レ大_キ王_ノ之_ハ天下_ニ申_賜者_ハ云_クとあるハ、天皇
の敷_ス座_ス天下_ノの大_ニ政_ヲを高_ニ市_ノ皇_子、尊_ノの執_リ申_シ給_ヘバと云
なり。五卷_一三_丁、天下_ニ奏_ル多_ク麻_比志_シ家_子等_撰多_ク麻_比天_云
云_トあるも同_ト。又十九_丁四十_丁、古_昔尔_君之_ハ三_代經_仕家_利
吾_レ大_キ王_波七_世申_祢これら皆_申ハ執_リ申_スことよて、俗
よヒキウケテトリマカナウといふ意_{ナリ}。又十八_丁十二_丁

一、保_ホ里_リ江_エ欲_ヨ里_リ水_ミ乎_ヲ妣_ビ吉_キ之_ハ都_ツ追_ヒ美_ミ布_フ祢_チ左_サ須_ス之_ハ津_ツ乎_ヲ能_レ登_ト
母_モ波_ハ加_カ波_ハ能_レ瀬_ヒ麻_マ宇_ウ勢_セとあるも、ヒキウケトリマカナウ
テ、河_カ瀬_ニ御_ミ舟_ノ難_ナマヌヤウニ仕_ツ奉_マとの意_ヨて、これも
天_ノ下_ニ申_スといふ申_スと同_シ言_ハなり。○五卷_一三_丁、諸_ク能_レ大_キ御_ミ神_{カミ}
等_多船_チ舳_ハ尔_ニ道_{ミチ}引_ビ麻_マ遠_ヲ志_シ云_クとあるハ、今_ノ世_ニも、尊_キ方_ニ
對_ヒて、御_ミ教_ヲへ申_ス、御_ミ習_ヒ申_ス、などいふ申_スも同_ト意_ニ
きこえさう、これもせと、天_ノ下_ニ申_スの申_スより、轉_ルるなるべ
し。

○み部

み
ミヨ
ミヤレ

一卷十六 二、淋人乃良跡吉見而好常言師芳野吉見與良人四來三とあるハ、ヨウミヨ、あるハヨウミヤレと云意なり。

み

サニ | イエニ | ツテ | ンデ | ウ | イ物ニ

カラウトテ | ンデアアル間 | イ | モシ | タリ

一卷十五 一、空蟬之命乎惜美浪尔所濕伊良虞能島之玉藻刈食とあるハ、命が惜サニ、或ハ命が惜イエエニと云意なり。二、卷廿一 一、青駒之足搔乎速雲居曾妹之當乎過而來計類とあるハ、足搔ガハヤサニ、或ハアガキガハヤイエエニと云意なり。こハ集中ムことに甚多し。又上乎

と云辞のなきも同トことなり。一卷二十 一、暮相而朝面無美ナ、隠尔加氣長妹之廬利為里計武とあるハ、朝面無サニ、或ハナイエエニと云意なり。三、卷三十 一、越海乃手結之浦矣、客為而見者乏見日本思櫃とあるハ、見レバ乏シサニ、或ハ乏シイエエニと云意なり。かやう乎の辞の上よなきも集中に甚多し。准へて知べし。又云く美等とつゞけさるも甚多し。又云く美可、云く美也、云く美許曾、云く美叙ミなど種シくイ連ね云さり、皆美と云辞の意ハ異れることる。一、卷二十九 一、天皇乃御命畏美柔備尔之家乎擇、云くとあるハ、御命ヲカシコマツテ、或ハ御命ヲ

カシコンデカシなどいそむが如し。これも集中よいと多き
つゞけなり。まゝカシ畏美等といへるも同意なり。○四卷三
丁二。吾妹兒矣。相令知人乎。許曾戀之。益者恨三念とある
也。ウラメシウオモへと云意なり。十一三丁二。眉根搔下
言借見思有尔。去家人乎。相見鶴鴨とあるハ。裏イフカシ
ウと云意なり。集中は甚多し。伊勢物語よいとねふみか
さなる山ハへごてねどあそぬ日おかくこひりさるあ
なとある也。十一七丁二。石根踏重成山。雖不有不相日。數戀
度鴨とあるを。つくりあへるものなり。さてあそぬ日
たかみといそむて。たやくと云るは。あそぬ日たやく

戀しくと思ふよりの歌よして。かの物語をつくれるが
ゆゑなり。あられども。たかみハ。オホサニとも。オホウと
も。譯さるゝ詞のさぶまりなれむ。いづれの意よとりて
も。たかみとこそいふべきことなるに。たほくと云るハ。
かた頃たかみと云てハ。オホウと云意なることを。う
しなひさるがゆゑ。よあらむ。かやうのところを。たほ
くとやうよ云て。いさくつさるくきこゆることなる
をや。○四卷三丁二。絶常云者。和備深責跡。焼太刀乃隔付
經事者。幸也。吾君とあるハ。ワビシイ物ニセウトテ。と云
意なり。十二二丁九。相見欲為者。從君毛。吾曾益而伊布可

思美為也シミスルとあるハ、イフカシイ物ニスルと云意なり。同卷四丁下。白妙シヨクミョウ乃袖之別乎ノセノワケナラシム。難見為而シカタクミシテ荒津之濱屋取為鴨アラツノハマニヤドリスルカモとあるハ、難イ物ニシテと云意なり。この美ハ、後世言よ、重んずるなど云んと同言よて、其も本ハ、重を重く、輕を輕くするると云詞の類れざるものなり。その重を重くする、輕を輕くするなど云も、重イ物ニスル、輕イ物ニスルといふ意なるよ。准へて、まべてを辨べ。○三卷三丁下。不見而往者ミズナレテユクバシ益而戀石見ナシテコヒシ云くとあるハ、益テ戀シカラウトテと云意なり。同卷四丁下。足日木能石根許其思美アジヒキノイハチコトシミ菅根乎カサネノヒカバ引者難ヒキバカタク三等標耳曾結焉トシメノミミソクヨフ四卷四丁下。今夜之早開者コノヨラノハヤクアケルモノ為便乎ベレバ無美秋ナシメキ

百夜乎ヒヨクニ願鶴鴨ネガヒツルカモなどある同トことよて、未來をかけていへる詞なり。古來此用様の意を辨へざる人なくして、一首の大概オホサキを誤りしること多し。○八卷九丁下。夏野乃繁ナツノシゲ見丹開有ミニサケル姫由理乃ヒメユリノ不所知戀者シラエヌコヒハ苦物乎クモノナラとあるハ、繁シゲンデアル間マニといふ意なり。十七七丁下。波流乃野能之氣美ハルノノシメ登妣トビ久ク鷲音ウツネ太尔タニ伎加受キカズ云く。十九五丁下。暮左クサレ禮レ婆藤ハハ之繁美丹シゲミ云くなどある。みな同ト。○十一三丁下。泊瀨川トクセガハ速見ハヤミ早湍乎ハヤヒ結上而ムスブテ不飽アカズ八妹ヤイモ登問師トヒシ公羽裳キミハセとあるハ、速イ早湍をと云意なり。此例集中外ナラズ見えざる所なり。尤めづらき用ひ様なり。金槐集キンケイ。君が代キミノヨ猶長らへて

月清み秋の御空此影を待らむとある美ハ用ひざま同
トことあり○三卷六十雄自毛能負見抱見云くとあ
るハ負モシ抱モシ或ハ負タリ抱タリと云意なり十一
二十波祢護今為妹之浦若見咲見愠見著四紐解又十
六梓弓引見弛見云く十二十六梓弓引見縦見云く十
六八三名之綿蚊黒為髮尾信櫛持於是蚊寸垂取束舉
而裳纏見云く十八二十波之吉余之曾能都末能古等
安沙余比尔惠美く惠末須毛云く又二十乎登女良尔都
刀尔母夜里美之路多倍能蘇泥尔毛古伎礼香具播之美
於枳豆可良之美云く新撰萬葉不飽芝手君緒戀鶴淚

許曾浮杵見沈箕手有且都礼古今六帖逢事ハるよ
の池此水なれや絶み絶ずみ年の経ぬらむ伊勢集よと
しるををあひみあをむみあげきけむ人のうへこそ我
身なりけれ後撰集よ十月降み降むみさごめなき志ぐ
れぞ冬の初るりけるなどあるみれ同ト猶後くよ甚多
き言なり。

みぢほーミタイ

六卷四十山見者山裳見貌石里見者里裳住吉云くと
ある見貌石ハ見之欲よて見タイと云よあされり。

みこと、はさず 御意不被成

二卷^{二十}八丁^二。明言^フ尔^ト。御言^{コト}不^ハ御問^{サズ}。云^クとあるハ、御意不被^ス成^ルと云意なり。

みさを キヤシヤ

四卷^{四十}九丁^一。足引^{アソビ}乃^ノ山^{ヤマ}尔^ニ四^シ居^レ者^ハ。風流^{フウリウ}無^ク三^ニ吾^ガ為^ス流^ル和^ワ射^サ乎^ヲ。

害目^{トガメ}賜^{タマ}名^ナとあるハ、山分^{ヤマワケ}デハ、諸事^{シヨウジ}ブコツナコトゲヤニ

ヨツテ、キヤシヤニハナク候ヘドモ、ワタクシノカヤウ

ニ仕リマシタ事ヲ、御難^{ミカシ}シ不被^ス遊^ブニ御覽^{ミカシ}ジテ、御心^{ミカシ}ヲ御

ナグサメ被^レ遊^ブヨと云意なるべし。此^{コノ}山邊^{ヤマノヘ}より、何物^{ニモ}も

まれ献^トるとてよめるなるべし。風流^{フウリウ}ハ、靈異^{レイイ}記^キ。風流^{フウリウ}風

聲^{コエ}三^ニ左^サ乎^ヲ、まゝ氣調^{キチウ}弥^ミ佐^サ乎^ヲなどあり。字書ニ、操節操、又拾

風調曰操とあり。

靈異記上、大和國宇多郡漆部里有風流女云々、天年風聲為行云、彼氣調恰

知天上客云々。

古事記雄略天皇條

一、引田部赤猪子ヲ

ことを、然汝守志待

命、從過、是、其、愛

將云々、古訓古事記

遺集^イ。三瀨川^{ミセガハ}渡^ワる美佐^{ミサ}乎^ヲもなありけり。何^{ニモ}小^コ衣^イをぬき

てのへらむ。中右記^{ナカミサキ}。寛治^{カンシ}八年^{ハチノトシ}八月^{ハチノツキ}十九日^{イソノヒ}。今夜^{コノヨ}、大殿^{オホノミヤ}於^ニ

賀陽院^{カヨウイン}有^リ哥^カ合^{カヒ}興^{キョウ}。是^{コト}依^リ永承^{エイジョウ}例^{レイ}。女房^{メヤウ}與^ト男房^{オトヤウ}為^シ讀^ミ人^{トシ}云^ク。寢

殿^{ノミヤ}、巽角^{タカサキノツノ}東面^{トウメン}、戸前^{カドノマエ}立^テ切燈臺^{キリトウダイ}二^ニ本^ホ。流無風云^クとあるも、花車

風流^{フウリウ}装飾^{ソウジキ}れることなり。と云義^{トク}ふや。

みさく ミハラス

一^ニ卷^{マキ}十三^ノ丁^ノ。數^{ヒキ}く毛^モ見^ミ放^{サカ}武^ム八^ヤ方^マ雄^ヲ。云^クとあるハ、見^ミハラ

ス^ベキ山^{ヤマ}ヂヤニと云意なり。三^ニ卷^{マキ}五十^ノ丁^ノ。去^{ユク}左^サ尔^ニ波^ハ二^ニ吾^ガ

見^ミ之^シ此^{コノ}埒^{サキ}乎^ヲ、獨^ヒ過^リ者^ハ情^{シノホ}悲^シ哀^シ。一^ニ云^ク見^ミ毛^モ左^サ可^カ受^ズ伎^キ濃^ヌとある

也^{ナリ}。三^ニハ^ラシ^シモ^セズ^ニキ^タといふ意なり。をべて放^サハ、遠^{トウ}

く見せらすを云。振放見など云るよて知べし。

みさご ビシーヤゴ

三卷三十四。美沙居石轉尔生名乘藻乃名者告為豆余親

者知友十一三十七。水沙兒居奥鹿磯尔縁浪往方毛不知

吾戀久波なとなわあり。三佐兒とも書り。今俗よビシ

ヤゴといふ鳥なり。

みちもせに 道一ッパイニ

せ部よ出。

みちもり ミチバン

四卷三十二。吾背子之往乃万々。將追跡者千遍雖念手孺

女。吾身之有者。道守之將問答乎。言將遣為便乎。不知跡立
而爪衝とある道守ハミチバンと云が如し。

みつる オトロヘヤツレル

四卷四十四。丈夫跡念流吾乎。如此許三礼二見津礼片思

男責とあるハ甚シウオトロヘヤツレテモ。コノヤウニ

片思ヲシテサアラウカヤと云意なり。十卷二十一。香細

寸花橘乎。玉貫將送妹者。三礼而毛有香とあるハ同日

本紀。贏字をミツルとよめり。

みづはあ 水ノデバナ

十九二十九。宇能花乎。令腐霖雨之始水逝縁木積成將因

兒毛我母とあるハ、契冲俗ヨ水ノデバナといふヨ同ト
といへり。

みつぼ 水ノアワツブ

廿卷ニテ、美都煩奈須可礼流身曾等波之礼、杼母奈
保之祢我比都知等世能伊乃知乎とある美都煩ハ水粒
よて、水ノアワツブのことあり。

みなぎー ミテナグサンダ

十九丁ハ、和我勢故等手携而曉來者出立向暮去者振
放見都追念暢見奈疑之山尔云くとあるハ、相共ニ見テ
慰ンダ其山ニ云くと云意なり。

みね ゼツテウ

峯嶺等の字を美祢と訓也。今俗ヨ云ゼツテウのこと
也。

みねもせに ゼツテウ一ッパイニ

せ部考合べー。

みまー ソナタ

伊麻之といふヨ同ト古言ヨ、汝を伊麻之とも、美麻之と
もいへり。い部合考べー。

みむ ミヨウ

將並と云ハナミヨウ、將恨と云ハウラミヨウと俗ヨ云

よ同じ。

みやこび ミヤコメキ

三卷 二十丁 昔者社難波居中跡所言奚米今者京引都備
仁鷄里 引ハ利字の誤 とあるハ都梅イタワイと云意あり

みる オモウ

二卷 四十丁 春野焼野火登見左右燎火乎何如問者云く
とあるハ野火ヂヤト思フマデと云意あり。

○む部

む ウメル

來武行武などあるハカウイカウと云意なれば武を俗
よウと云よあされり。○十九 十七丁 霍公鳥今來喧曾無
菖蒲可都良久麻泥尔加流く日安良米也とあるハ來テ
鳴ソメルといふことあり。

むあー マヘカタ

三卷 二十丁 昔者社難波居中跡所言奚米今者京引都備
仁鷄里 又二十丁 昔見之象乃小河乎今見者弥清成尔來鴨
又 五十丁 昔許曾外尔毛見之加吾妹子之奥擲常念者波之
吉佐寶山などある昔ハみなマヘカタといふことあり。

むろく ホンモウ

十八二十四丁_二。思良多麻能伊保都_一度比乎_二手尔牟湏妣_一於
許世牟安麻波牟賀思久母安流香_一とあるハ、オビタ、シ
イ白玉ヲトツテ吾方ニオコサン漁夫ハ、ホンモウデモ
アル哉とまり、延喜六年日本紀竟宴歌_一。伊佐袁志久多
陀斯岐_一湍知乃於牟迦斯佐斗豆曾和我那毛岐微波多末
比斯_一とあるも、イソシウタ_一バシイ道ガホンモウチヤト
テ、吾名ヲツカハサレタと謂なり。抑牟加思_一トハ、向_一ヨ
テ、何にまれ心_一ニ協_一ヒテ喜_一キことと_一マテ、其方_一ニ向_一を
るより云ることあり。於牟迦斯_一ハ、面向_一ヨマテ、これ_一も右
と同意な_一がら、牟加_一斯_一を今少_一ヨハ_一ヨク云_一る方_一なり。

と知べし。

むけのまに

歸服サセルマ、ニ

十八二十一丁_二。毛能乃布能八十伴雄乎_一麻都呂倍乃牟氣乃
麻尔_一く_一老人毛女童兒毛之我願心太良比尔_一撫賜治賜
婆云_一くとある。牟氣_一ハ、言歸_一の牟氣_一マテ、令歸_一の縮_一ヨ_一る
なり。即歸服サセルマ、ニと云意なり。天皇の天下萬民
を惠み撫賜ふハ、服從_一ヒ歸_一キ化_一ヨ_一むる大御_一ヨ_一ざるハ、
かく_一をい_一へり。

むをハエル

一卷十五丁_二。河上乃湯津磐村二草武左受常丹毛冀名常

處女煮手三卷十六。香山之銚ニ。檜之本ル。薛生左右二十。
三三。甘嘗備乃三諸乃神之帶為。明日香之河之水尾速ハ。
生多米難石枕生。左右二云くな。どありて。武須ハ。ハエ
ルと云ことあり。日本紀。皇産靈此云美武須毘とあり
て。武須。産字をあてられ。常。武須子。武須女など云武
須も同。後世ハ苔のみむすといへども。古ハ志あら
ば。何よまれ自生出るを云る言あり。

むまぶ スクヒアゲル

十一三十。泊瀬川速見早湍乎結上而不飽八妹登問師
公羽裳七卷十二。命幸久在石流垂水く乎結飲都おど

ある。これらの結ハ。スクヒアゲルといふことなり。

むま トモニ

二卷十八。浪之共彼縁此依玉藻成依宿之妹乎云く。又
三十。冬木成春去來者野每着而有火之風之共靡如久
四丁。八卷二十。霍公鳥來鳴令響宇乃花能共也來之登
問麻思物乎などある共ハ。トモニといふことなり。

むまこと ウソ イヒナシ 無實ナコト

十一丁。朝茅原小野印空事何在云公待とある事ハ借
字よて。十二云。空言とある字意なり。イカナルワケチヤ
ト人ニウソツイテ。君ヲバマタウヤラと云るなり。廿卷

五十丁_二牟奈許等母於夜乃名多都奈とあるも、イヒナシ
ニモ或ハ無實ナコトニモ先祖ノ名ヲタヤスナとなり。

むる○むれ

定牟流ハサダメル留流ハトメル漆流ソメルなど、俗
よいふよ同じ牟礼も許曾のか、是れ結の異なるのみ
にて譯言ハ同ト。

○め部

め スカタ

十五丁_五由布佐礼婆比具良之伎奈久伊故麻山古延互
曾安我久流伊毛我目乎保里とあるハ妹が容儀ノ見タ

サニと云意なり君之目ハ君が容儀汝目ハ汝が容儀を
るよいづれも准べし彼方の容儀ハ此方の所見なれば
米と云るなり美延ハ米よ縮まれり君之目妹之目など
云ハ君妹が目口の目を云るよハ非ば。

めのれ メバナシ

三卷_{二十}佐保過而寧樂乃手祭置幣者妹乎目不離相
見漆跡衣とあるハ妹ヲメバナシセズニ見セシメタマ
ヘトテゾと云意なり目離とハ見る事のかれ行よ
草木の枯と云も生氣の離るよもてもと言あり
人目も草もかれぬと思へむなど後よもいへり。

めぐい ムゴラシウ

十一丁十九よ。人毛無古郷尔。有人乎。愍久也。君之戀尔令死

とあるハ。吾ヲ戀死ニ死ナセウトスルハ。ムゴラシイコ

ト哉となり。四卷八丁よ。都礼毛無。将有人乎。獨念尔。吾念

者。惑毛安流香とあるも。惑ハ愍字の寫誤よて。メグシク

モアルカなるべきまや。

めぐい カハイラシイ

九卷三丁よ。他妻尔。吾毛交牟。吾妻尔。他毛言問云く。今日

耳者。目串毛勿見事。毛咎莫とあるハ。ジブンノ女房ヂヤ

ト云テ。フダンノヤウニカハイラシウバツカリ思フナ。

人ニ交トテモ。トガメルナと云意なるべし。十八五丁よ。

父母乎。見波多布刀。久妻子。見婆可奈之。久米具之とある

も同ト。十七三丁よ。妹毛吾毛。許己吕波。於夜自多具。弊礼

登伊夜奈。都可之。久相見婆。登許波都波奈尔。情具之。眼具

之母奈之尔。云くとあるハ。眼ぐく無と云意よハ非ズ

奈之尔ハ。切なることを切なきと云怪しかることを怪

しからぬと云ごとく意得べし。されバこれも眼具之と

云るよ同ト。

めぐい ミルコトイフコト

二卷三丁よ。飛鳥云く。味澤經目。辞毛絶奴。云くとあるハ。

目辞メジとい。目と辞との二を云て。三ルコトモイフコトモ
絶ツツ夕といふなり。目ハ見る事。辞ハいふ事なり。四卷四丁
海山毛ウミヤマモ。隔莫國ヘカラナクニ。奈何鴨ナニシカモ。自言乎谷裳メコトヲガニモ。幾許コトモシキ之寸シともあり。
同意あり。

めを
ゴランジル
ゴライウジル
アガル

一、卷ニ丁ニ。食國乎ヲスクニヲム。賣之シタス。賜牟登ムト。云くとあるハ。御覽ゴランジア
ソバサレウトテと云意なり。三、卷五丁ニ。波之ハシ。吉可聞キカモ。皇
子之命コノミコト乃安里我欲比ヨヒヒシ。見之活道イクヂ乃路者荒尔ミチハアレニ。鷄里ケリとある
て。御覽ゴランジタ活道ノ路ハアレタワイと云意なり。十九十三
丁。八隅ヤスミ知之シ。吾大皇秋花之我色ワオホキミアキハナシガいろくニ。尔見賜ニミタス。明米多麻比アカタマヒ

云く。秋時アキトキ花種ハナタネ尔有等ニイロ。色别イロバ尔見之ミシ。明良牟流アカラムル。今日之貴左ケノタサ
廿卷ニ丁ニ。母能其等モノゴトニ。尔佐可ニサカユル。由流等ユルトキト。仗登キトメ。賣之多麻比シタマヒ。安
伎良米多麻比キラムタマヒ。云く。又マタ。一丁。波布久受能ハフクウケノ。多要受之タヤウケシ。努波牟ヌハム
於保吉美能オホキミノ。賣之思野邊ウシノヘ。尔波之米ニハシメユフ。由布倍之母ユフベノモ。あどある
みな同ド。○八卷ニ丁ニ。戲奴之為ワケガタメ。吾手母ワタノモ。須麻尔スマニ。春野尔ハルノ
拔流ヒキル。茅花曾チハナソ。御食而肥座メシテコエモ。とあるハ。アガツテ御肥ナサリ
マセと云意あり。十六三丁ニ。石麻吕尔イスマロニ。吾物申ワモノヲウケテ。夏瘦尔ナツウセニ。吉
跡チ云物曾フモノソ。武奈伎取食ムナギトリメ。反也サカシ。とあるハ。鱸ヲ漁トウテアガリマ
セと云意なり。そむく。賣メ。須とハ。尊者の見給ふことを。
ご見ミ。須と云。又所聞見須キコシメス。所知見須シロシメス。など云。見須ミ。見給

ふと云謂なり。又尊者の前へ親く呼寄ることをも云て。集中モも。召事モ毛無シ。或ハ召シ而使之シるシなどやうよ云。又今世よも。常然云ことなり。これも眼前ニ見給ふ意よりいへるなり。さてそれより轉リて。必見ルることならでも。親く身ニ受入ることを尊みて。食ツことなるとよも云るなり。則チ飯ヲを賣シ之と云もそれなり。これも尊者の食物をさふとみていへるが。たのづから轉リて。食物をなべていふ称ナのごとくなれるなり。又船ヲめを馬ニにめすなどやうよ云も。同トことこの轉れるよて。みあるものとい。見る意よつきていへるなり。尊者の間給ふことを。所聞キコといふこ

とハ常なるを。それより轉リて。酒など飲給ふことをも。伎キ己コ湏スといふと。全ラ同トことなり。

めむ メヨウ

將ヤ止ムと云ハヤメヨウ。將ト留ムと云ハトメヨウと俗ニ云に同ト。

めり○める○めれ オモハレル ヤウニオモハレル

サウオモハレル

勝カ賣メ利リハ。カツヤウニオモハレルといふ意なり。きべて云く賣メ利リと云ハ。云くノヤウニオモハレル。或ハサウオモハレルと云意なり。但此詞。十四東歌よ。一ツあるのみよ

て古語よをさく見えぬことなり。賣留賣礼も上のか
か。且ふよりて結の異なるのみよて。譯言ハ同トことな
り。

めり○める○めれ ダ デアル

清有ハスンダ或ハスンデアルといふ意なり。霞有ハカ
スンダ或ハカスンデアルといふ意なり。漆有ハソソ
或ハソソデアル又ハソソウダ或ハソソウデアルといふ意
なり。賣留賣礼も上のか。且ふよりて結詞の異なるの
みよて。譯言ハ同トことなり。

めをやさみ 見ヨイ

十二ニナハハ丁丁小竹之上シノノ上ウ尔ニ來居而鳴鳥目乎安見人妻妬尔
吾戀コイ二來ニとあるハ見惡ミカラズ見ヨイユエニ或ハ見ヨ
サニと云意なり。目安ハ見惡ミきの反よて愛賞ウツクシをること
にいへり。難見の反よて易見意ハあらず。源氏物語桐
壺よ更衣の事をさまのちまどのめでこの事こと
心むせの柔ユカ和カよ目安く惡み難かり。事など今ぞだが
一出る云くとあるも愛賞する方よ云るよて同意なり。

○も部

も モマタ ラモ デモ ナリトモ マア ウ

一卷ニ丁丁よ。熨田津尔ニ船乘世武登月待者潮毛可奈比沼今

者許藝豆菜とあるハ。月ノ出ルヲ待テアルニ。月ノ三
ラズ。潮モマタミチ來テ。御舟ヲ出スニ。時カカナウタと
云意なり○一卷十一。君之齒母吾代毛所知武磨代乃
岡之草根乎。去來結手名とあるハ。君ガヨハヒヲモ吾ヨ
ハヒヲモ兼ニシラウと云意なり。母ハ物ニッを兼ていふ
詞なり○一卷十三。數々毛見放武八万雄情無雲乃隱
障倍之也とあるハ。數々シクテモ。或ハ數々ナリトモと云意
なり。心だらひなることをかふるべとも。せめて數々あ
りともと云意なり。○一卷十七。百磯城之。大宮處見者
悲毛など。かゝる處よ用ひとる毛ハ。皆歎息の辞よて。サ

テモマアカナシイコトニテアル哉といふ意なり○二
卷十二。玉葛花耳開而不成有者。誰戀尔有目。吾孤悲念
乎とあるハ。タガコヒナラモと訓て。誰ガ戀よ有むと云
意なり。されバこの目ハ。牟の通へる辞よて。俗に誰ガ身
ノ上ノ戀デアラウといふよあされり。
七くさく タントサク
二卷三十。水傳磯乃浦回乃石乍自木立開道乎。又將見
鴨とあるハ。俗小タントサクと云意なり。
もころを ホウバイ
九卷三十六。後有菟原壯士伊仰天叫於良妣。踞地牙喫建

怒而如己男尔負而者不有跡懸佩之小劔取佩冬菽蕓都
良尋去祁禮婆云とある母己呂ハ如といふ意の古言
よて廿卷ハ丁よ見ゆ如己男ハ字意のごとし俗は傍輩
といふが如し。

もだ ダマル ゾノマハ

三卷ニ丁よ黙然居而賢良為者飲酒而醉泣為尔尚不如
來とあるハダマツテヲツテと云意あり十七丁よ佐
家理等母之良受之安良婆母太毛安良年己能夜萬夫吉
乎美勢追都母等奈とあるハ咲タト云コトヲモ知ズニ
居ルナラヤサテモ病躰ニアラズハ行テ見ヤウニト

思ウテ太息ヲツクコトモセズニソノマ、ダマツテ居
ヨウニと云意あり。

もどほり メグラ

十九ニ丁よ大殿乃此母等保里能雪奈布美曾祢云と
あるハメグラといふことあり。

もどほる マハル

古事記神武天皇御歌よ加牟加是能伊勢能宇美能意斐
志尔波比母登富呂布志多陀美能伊波比母登富理宇知
互志夜麻牟集中よ行多毛登保留又榜多毛登保留など
往とある多ハ添とる詞よてみれマハルといふことか

已。

もこな メツタムセウニ ムサト エシヤクモナウ

三卷 二十 四丁 二。如是故尔。不見跡云物乎。樂波之舊都乎。令見

乍本名とあるハ。本名令見乍といふことよて。メツタム

セウニ見セテサ。或ハムサト見セテサと云意なり。四卷

三十一。狭夜中尔。友喚千鳥物念跡。和備居時二。鳴乍本名

とあるハ。本名鳴乍といふことよて。エシヤクモナウ鳴

テサジユツナガラセルと云意あり。

もなく 仕合ヨウ ブナンデ

五卷 三十 七丁 二。靈尅内限者。平氣久安。久母阿良牟遠事。母無

裳無母阿良牟遠云とあるハ。仕合ヨウ。或ハブナンデ
の謂なり。

もの モノヲ モノヂヤニ

四卷 十八 丁 二。吾以在三相二。搓流絲用而。附手益物。今曾悔

寸とあるハ。結び着ウモノヲ。又結び着ウ物ヂヤニとい

ふ意なり。五卷 二十 丁 二。阿摩等夫夜等。利尔母賀母夜。美夜

古摩提意久利摩遠志。互等比可弊流母能。十三 丁 二。公奉

而越得之牟物。古事記履中天皇御歌。多遲比怒迹。泥牟

登斯理勢婆多都。碁母暮母知。互許麻志母能。泥牟登斯理

勢婆雄畧天皇御歌。加那須伎母伊本知母賀母須岐波

奴流母能。これらの母能皆同ト。

もはら スキト 子カラ

十一 四丁 二。海底奥乎深目手。生藻之最。今社戀者。為便無

寸とある最ハ。俗ヨスキトといふみあされり。又子カラ

とも譯すべし。古今集ニ。逢事のもをら絶ぬる時よこそ。

人の戀一き事も忘りけれとあるも同ト。

もはむを 思ハウヨリハ

三卷 一丁 二。驗無物乎不念者。一坏乃濁酒乎。可飲有良師

とあるハ。センノナイ物ヲ思ハウヨリハと云意あり。

もらす マモラツシヤル

十卷 四丁 二。足日木乃山之跡。陰尔鳴鹿之聲。聞為八方山
田守酢兒とあるハ。山田ヲ守ラツシヤル人と云意あり。

○や部

や カ

戀哉將渡今也。咲良武などあるハ。コヒワタラウガ。今サ
クラウカ。と云意るレバ也。ハ。俗言よカと云よあされり。

やさー ハツカシ

五卷 丁 二。多麻之未能許能可波加美尔。伊返波阿礼騰吉
美乎夜佐之美。阿良波佐受阿利吉。又世間乎。守之等夜
佐之等。於母倍杼母飛立可祢都。鳥尔之阿良祢婆。などあ

るハ、ハヅカシと云意なり。古今集よ。何をして身のいと
づらよ老ぬらむ。年の思とも事もやさきとあるも同
ト。竹取物語よ。あまこの人けこゝろざいおろのさらざ
アをむなしくなるてこそあれ。きのふけふみあど
れのこまをむことにつらむひとまよやさきといへむ
云く。源氏物語真木柱よ。今の志のいまめかき人を
とてもてかづらむかこもみよ人まろくてそひも
の給をむも。人きよやさきかるべし。契沖云。俗よこ
ろある人をやさき人などいふを。はづらき人とい
ふことなるを。何となくいひるるまよに。風流なるこ

とをまをもちやさきといふやうにのみ。おもひあへり。

やつよ 永代

十八丁ニよ。多知婆奈能登乎能多知波奈夜都代尔母安
礼波和須礼自許乃多知婆奈乎とある。夜都代ハ。弥津代
よて。永代ニモと云意あり。

やと イヘノ戸

四卷五十二丁よ。暮去者屋戸開設而吾将待夢尔相见二将来
云比登乎十二丁ハよ。人見而事害目不為夢尔吾今夜将至
屋戸閉勿勤とあるハ。舍屋ノ戸よて。屋に闔戸を謂ア。古
事記よ。天照大御神見畏閉天岩屋戸而刺許母理坐也と

あるも石屋は闔戸なり。

やど イヘノメグラ テイゼン ヤシキ内 旅シユク イヘ井

十卷 九 梅花取持見者吾屋前之柳乃眉師所念可聞又

三十 吾屋戸尔鳴之鴈哭雲上尔今夜喧成國方可聞遊羣

又 四十 影草乃生有屋外之暮陰尔鳴蟋蟀者雖聞不足可

聞るとあるハ屋戸と書る字の意よてをべて舎屋ノメ

グラといふことなり或ハテイゼンヤシキ内などとも

歌よりて聞べー〇六卷 四十 久堅乃雨者零敷念子

之屋戸尔今夜者明而將去八卷 五十 波太湏珠寸尾花

逆葺黒木用造有室戸者迄萬代 戸字舊本よ 又 同 青丹吉

奈良乃山有黒木用造有室戸者雖居座不飽可聞十九

ハ 二 青柳乃保都枝與治等理可豆良久波君之屋戸尔之

千年保久等曾などあるハ即家居のことなり〇十八

ハ 二 夜夫奈美能佐刀尔夜度可里波流佐米尔許母理都

追年等伊母尔都宜都夜十五 四 君之由久海邊乃夜杼

尔奇里多々婆安我多知奈氣久伊伎等之理麻勢などあ

るハ旅などによりて宿卧する屋を謂て常は宿といふ

よ直よあされり旅シユクと譯をべー

やはき カウサンサセル

二卷 三十 千磐破人乎和為跡不奉仕國乎治跡云くと

あるハ、朝敵ヲカウサンサセヨトテ、と云意なり。廿卷
丁二、知波夜夫流神乎許等牟氣麻都呂倍奴比等乎母夜
波志とあるも、降參サセと云意なり。大殿祭祝詞、言直
志和志古語云マシテ坐豆云く、倭姬命世記、夜波志、都米
ども見えたり。

やまびこ コダマ

八卷四十丁二、山妣姑乃相響左右妻戀尔鹿鳴山邊尔獨耳
為十卷十八丁二、山彦乃答響万田霍公鳥都麻戀為良思左
夜中尔鳴カクなどあるハ、コダマノヒバクマデといふこと
なり。

やまのは 山ノハシ 山ノハナ

三卷四十丁二、所見見十方孰不戀有米山之末尔射狭夜歷
月乎外尔見而思香とあるハ、山ノ端末ニあり、或ハ土左
の方言、山ノハナと云ふ同ト。四卷十二丁二、山羽六卷十三丁
二、山之葉又同卷三十一丁二、山葉十五十一丁二、山乃
波など見えたりみな同ト。

やまのま 山ノアハヒ

一卷十三丁二、青丹吉奈良能山乃山際伊隱万代云く、三卷
四十丁二、山際尔伊佐夜歷雲者云く、又山際從出雲兒等者
云く、又五十丁九、山際往過奴礼婆云く、六卷十三丁二、象山際乃

云く。又四十三丁鹿脊山際尔云く。七卷九丁山際尔渡秋沙乃云く。又十丁山際尔霞立良武云く。八卷十四丁山際遠木末乃云く。十卷七丁山際尔鷺喧而云く。又八丁山際尔雪者零管云く。又山際之雪不消乎云く。又九丁山際最木末之云く。などある山際ハ山の間を云。或人これらの山際をヤマノハと訓るをひが言なり。島際木際なども書り。際をマ。なることまぎれな。玉篇。際接也。壁會也。方也。合也とあり。これもマと訓べき據なるをや。

やまかひ○やまのかひ 山ト山トノアハヒ
十卷九丁足日木之山間照櫻花是春雨尔散去鴨十七

五丁夜麻可比尔佐家流佐久良乎多太比等米伎美尔弥西底婆奈尔乎可於母波牟同卷十三丁山乃可比曾許登母見延受乎登都日毛昨日毛今日毛由吉能布礼く婆るどある。みる。山ト山トノアハヒと云ことなり。

やまもせに 山一パイニ
せ部よ出。

やまごちばあ ヤブカウジ
四卷四十丁足引之山橋乃色丹出而語言繼而相事毛將有廿卷五十丁氣能己里能由伎尔安倍互流安之比奇之夜麻多知婆奈乎都乃尔通弥許奈るとなふあり。今俗ふ。

ヤブカウジと呼ぶ。

やまさび 山メキ

さ、部さび條、合考べし。

やろ イナス

四卷 丁二。打日指ウチヒサス宮ミヤ行ニ兒コ乎ヲ真マ悲カシ見ミ留トム者ハ苦ク聽ヤル去ル者ハ為ス便ベ無ナシとあるハイナスと云意なり。古今集陸奥歌よあふくまに霧立渡り明ぬとも。君をばやらと待ハそべあしとあるも。君をバイナスマイと云意なり。

ゆ、部

ゆ エル

見ミ由ユハミエルキ聞ク由ユハキコエルルと俗よいふ小同ト。

ゆ カラ ラ ニ

五、卷 丁九。伊豆久由加イヅクユカ又一丁十。阿麻能見虚喻アマノミソラユ六、卷 丁十一。真木立山湯マキタヤマユ又丁十二。左日鹿野由サヒカヌユ十一。久時由ヒサキトキユ十四。丁二。伊豆由可母イヅユカモ十五。丁七。伊素未乃宇良由イソミノウラユ又丁八。奈美能ナミノ宇倍由見由ウベユミユ十六。丁三十一。中門由ナカカドユ十七。丁九。伊尔之弊由イルノシハユ十九。丁三十一。平城京師由ヘイランキョウシユ廿、卷 丁五。宇倍之神代由ウベノシカミヨユ又丁三十。六之良比氣乃宇倍由ムサシノウベユなどあり。此等の由ハ用理と云よ同意よして。常よカラといふよ同ト。久時由ヒサキトキユハ久シイ時カラと云意なる小。餘ハ准べし。〇十八。丁六。許由奈伎和コユナキワ

多礼十四三十三。於保夫祢乎。倍由毛登毛由毛。可多米提之。許曾能左刀妣等。阿良波左米可毛。るどある由ハ。フと云意なり。許由ハ。此間ヲと云意。倍由毛登毛由毛ハ。舳ヲモ艦ヲモと云意なる。餘ハ准へて知べし。繼體天皇紀。歌。歟都細能。寄婆庾那峨例俱屢とある庾も同ト。此ハ古今集春下。清原深養父。歌の詞書。山川より花の流。きけるを作るとある。山川より。山川ヲと云意なる。其用理と全同ト用様なり。○十四十四。目由可汝乎見牟とあるハ。目ニ汝ヲ見ヤウカと云意あり。此ハ四卷三十一。從蘆邊滿來塩乃。云く。とあるも。蘆邊ニと云意。よて。今の

由ハ。この從と全同ト。

ゆきころはいて 行トバイテ

十九四十一。韓國尔。由伎多良婆之。氏可敞里許牟。麻湏良多家乎尔。美伎多氏麻都流とあるハ。行トバイテと云意あり。

ゆきかへる ナンベンモイタリキタリスル

六卷二十。往還常尔我見之。香推滴從明日後尔波。見縁母奈思とあるハ。ナンベンモイタリキタリシテ常ニ見タ。と云意なり。十卷十一。春霞立春日野乎。往還吾者相見。弥年之黄土とあるハ。毎年春ニナツタナラナンベン

モイタリキタリシテアソバウと云意なり。

ゆきけ 雪ドケ

三卷^{三十八}丁^二。雪消^{雪消}為^為山道^{山道}尚^尚矣^矣。名積^{名積}叙^叙吾來^{吾來}並^並二^二とあるハ。雪ドケスルといふなり。雪のふらむとする氣色を雪氣といへること古^古よあり。

ゆくさくさ

イキシナキシナ

イキシダキシダ

三卷^{廿二}丁^二。白管^{白管}乃^乃真野^{真野}之^之榛原^{榛原}往^往左來^{左來}左君^{左君}社見^{社見}良米^{良米}真野^{真野}之^之榛原^{榛原}とある左^左ハ古言^{古言}又時^{又時}といふことを之^之太^太とも左^左太^太とも云るをその之^之太^太も左^左太^太も縮^縮れむともよ左^左とあり。肥前風土記歌^{肥前風土記歌}。為^為祢^祢豆^豆牟^牟志^志太^太夜^夜。率^率祢^祢てむ。集中^{集中}十

一^三十^十二^二。此^此左^左太^太過^過而^而十^十四^四二^二十^十二^二。阿^阿抱^抱思^思太^太毛^毛安^安波^波乃^乃敝^敝思^思太^太毛^毛廿^廿卷^卷六^六丁^丁二^二。和^和須^須例^例母^母之^之太^太波^波あど猶^猶多^多あり。これを今^今も土左^{土左}國^國の方言^{方言}よ。行^行シダ來^來シダなどいふも古言^{古言}の遺^遺れるなり。京師^{京師}あよりよてハ行^行シナ來^來シナといへ

ゆくく

ダクく

ドキく

ワナく

二卷^{十八}丁^二。丹生^{丹生}乃^乃河瀨^{河瀨}者^者不^不渡^渡而^而由^由久^久遊^遊久^久登^登戀^戀痛^痛吾^吾弟^弟乞^乞通^通來^來祢^祢とあるハ。ダクく或^或ハドキくト動^動悸^悸一^一て戀^戀る謂^謂なるべし。大船^{大船}乃^乃由^由久^久羅^羅くくといふも物の動^動揺^揺兒^兒をいふ古言^{古言}よて。同^同トことよきことゆ。又^又ハワナくとも譯

きべー

ゆゑユルク

十二丁。如是許將戀物其跡知者其夜者由多尔有益物乎とあるハソノアフタ夜ハユルク宿テハナシラスベキモノデアツタニと云意なり。

ゆゑけき タブツク

三卷二十丁。廬原乃清見之崎乃三穗乃浦乃寛見乍物念毛奈信廿卷二十丁。海原乃由多氣伎見都。安之我知流奈尔波尔等之波倍奴倍久於毛保由などあるハタブクト浪ノタブツイテ面白イ風景ヲ見ナガラと云意なり。

海の廣く寛あるを云ふハ非ず浪の由多くと動揺を云るなり。寛と書るハ借字のみなり。

ゆふさらす バンク

三卷三十丁。今日可聞明日香河乃夕不離川津鳴瀬之清有良武七卷三十丁。三空往月讀壯夕不去目庭雖見因縁毛無十卷四十丁。暮不離蝦鳴成云くなどあるハバンクと云意なり。每朝を朝不去と云と全同例なり。

ゆめ ダイジニセヨ ヨウマモレ カナラズ

在許須勿由米散許須勿由米紐解勿由米汝心由米などいふ由米ハ勤よといふことにて俗ムダイジニセヨ或

ハヨウマモレといふ意なり。今世も由米ユメ云々の
こと有アル勿ナなどやういふもダイジニセヨダイジニセ
ヨ。決シテ云くノ事アルナと云意なり或ハカナラズカ
ナラズと聞て宜イき所もあり。

ゆゝき オソレオホイ 慮外ガマシイ イマイシイ

キラハシイ

二、卷三十一。挂文カケクモ忌ニシ之シ伎キ鴨カモ言イハク久モ綾アヤ尔ニ畏カシキ伎キ云ク。三、卷十五
七。言イハク卷マ毛モ齊ユ忌シ志シ伎キ可カ物モ云クなどあるハ。オソレオホ
イ。或ハ慮外ガマシイと云意なり。恐れ多くて忌憚イマハ
き謂イいへるなり。六、卷十九。言イハク卷マ毛モ湯ユ敷シカラム有ト跡ト又十三

六、繫カケ卷マ裳モ湯ユ石シカ恐コシ十五七。湯ユ種タチ時マキ忌ユシキ伎キ美ミ尔ニ故コ非ヒ和ワ
多タ流ル香カ母モなどあるも同トこゝろをえるなり。四、卷十七。
獨ヒトリ宿チ而テ絶タス西ニ紐ヒモ緒ヲ忌ニシ見ミ跡ト世セ武ム為ス便ベ不シ知ラ哭キ耳ミ之シ曾ソ泣ナクとあ
るハイマイシカラウトテと云意なり。九て紐ヒモハマがあ
ひあれる妻メならでハ。結ヒ着キむべきものならぬを。離
れ居イて妻メがあらぬ故ユ。綻ホソク紐ヒモを他人タニなど着キめむ
ハ。忌憚イマしく思オモふ謂イなり。十、卷五十一。言イハク出デ而テ云ク者ハ忌シ漆シ朝アサ
貌ガホ乃ノ穂ホ庭ニハ開サキ不デ出ヌ戀コヒ為カモ鴨カモとあるも同ト。十二、卷七。朝アサ去イニ而テ
暮ユバ者ハ來キ座マス君キミ故ユ尔ニ忌シ久ク毛モ吾ア者ハ歎ナギ鶴ツル鴨カモとあるハイマイ
シウ。或ハキラハシウと云意なり。十七、卷四十四。許コト登ト尔ニ伊イ

泥底伊波婆由遊思美云々古事記雄畧天皇大御歌よ由
由斯伎加母加志波良袁登賣などあるも忌くく嫌ハ
しくて憚らるゝ方なり。

ゆらく

グワラツク

廿卷ハ五十下始春乃波都祢乃家布能多麻婆波伎手尔等
流可良尔由良久多麻能乎とあるハ玉の聲の鏘くと鳴
響を由良久と云とるよて俗よグワラツクといふが如
し玉之緒と結めとるハ其緒の鏘くと鏘くと云よ一の
詞ついきに聞ゆれども緒の鳴とハ云べくもあらざれ
む緒よ貫とる玉の鏘鳴よと云意を語路よ引れて由良

久玉之緒とハよまれとるなり鏘鳴くハ手玉の聲なり
と云説ハあとらず玉帚の玉なり又由良久を命を延る
こと、意得來れるハ命のことを靈之緒といへること
のあるによりて推度よ志の思へるよてさらよ云ふも
足ぬことなり。

ゆらに○ゆらよ

グワラツク

ガラツク

十卷下足玉母手珠毛由良尔織旗乎公之御衣尔縫將
堪可聞十三下海部處女等手尔卷流玉毛湯良羅尔云
云とある湯良羅ハ由良と云るよ同ト此ハ貫とる玉の
觸合てグワラツクと鳴聲を云ことなり古事記よ伊邪那

岐命云く、其御頸珠之玉緒母く由良尔取由良迦志而云云。まゝ奴那登母く由良尔とあるを、日本紀は瓊響瑤く、此云、奴儼等母く由羅尔と見え、まゝ手玉瓊瓏織絁之少女是誰之子耶ともありて、瑤くも玲瓏も玉聲と字書し見えたり。職員令集解は、饒速日命降自天時、天神授瑞寶十種、息津鏡一、部津鏡一、八握劍一、生玉一、足玉一、死反玉一、道反玉一、蛇比礼一、蜂比礼一、品之物比礼一、教導若痛所者、合茲十寶、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、云、而布瑠部由良く、く止布瑠部如此為者、死人返生矣とあるも、多くある玉よつきて、瑤くと振へと詔へるなり、十三丁、小鈴

文由良尔とあるも、鈴音のガラクと響をいへり。古事記袁祁、天皇大御歌、奴豆由良久母夜とあるも、同言を活用して詔へるあり、上に出せる由良久多麻能乎も、同じ遊仙窟も、鏘くをユラメイテと訓る。此字も瑤くと同じ。さて集中なるハ、母由良尔とある。母ハ、みか語、辞なるを。古事記と日本紀なるとの一の母ハ、真よて真瑤くあり。ゆりノチ

八卷二十、吾妹兒之家乃垣内乃佐由理花由利登云者、不許云二似とあるハ、ノチニアハウトイヒタレバと云意なり、十一丁、路邊草深百合之後云、妹命我知とある

そ、わがてユリといふは後字を用とり。

ゆり カラ

廿卷二十五丁。阿湏由利也。又二十六丁。奈尔波津由利。但此一

曆本よ。續紀四卷詔。高天原由利由字流布本よハ与と依り。依り一本よ依て引

十卷詔。皇朕高御座坐初由利。今年尔至麻豆云々。本由

理行來迹事曾止まどあり。用理と云よ全同ト。

ゆる ○ゆれ エル

見由流ハミエル。聞由流ハキコエルと俗よいふも同ト。

由礼も許曾のか、その結の異なるのみよて、譯言ハ同

ト。

ゆるを キマ、ニサセル ノカス

四卷三十八丁。今者吾羽和備曾四二結類氣乃緒尔。念師君

乎。縦左久思者とあるハ。縦す事を思へむと云意なり。十

二三十八丁。白細之袖之別者。雖惜思乱而。赦鶴鴨などある

縦ハ。俗ハキマ、ニサセルと云よ同ト。○十七四十五丁。矢

形尾乃。安我大黒尔之良奴里能。鈴登里都氣底朝。猶尔伊

保都登里多底暮。猶尔知登理布美多底於敷其等尔。由流

須許等奈久云ことあるハ。ノカスコトナウと云意なり。

ゆるに ナルモノヲ ガイヤニ ニヨツテ

一卷十四丁。紫草能尔保。澈流妹乎。尔苦久有者。人孀故尔。

吾戀目アレモメヤモ八方とあるハ。人妻ナルモノヲ。或ハ人妻ヤニ
 と云意なり。この用様オホフ子ハめて多し。十三十三。大舟能
 思憑オモヒタスル君故尔。盡心者。惜雲梨ヲシヤクモナシとあるハ。君なるハ故と云
 意の用ひ様シラよて。君ニヨツテと云十四。如し。十六十六。真
 珠者。緒絶タガヒ為尔。伎登聞之故尔。其緒復貫吾玉尔。將為とあ
 るハ。聞夕ニヨツテと云十四。如し。日本紀雄略天皇卷歌。
 耶麼能謎能古思麼古喻衛尔。比登涅羅賦宇麻能耶都礙
 播鳴思替矩謀那斯とあるも。コシマ兒ニヨツテと云十四。
 如し。これらハ皆今世も常云如き故よの意なり。古語
 よ云るハ。多くて君故尔。妹故尔キミユニイモユニと云ハ。君ナルモノヲ

或ハ君チヤニ妹チヤニと云意よ用ひて。尋常の如くい
 へることハ。いと少けまど。とえてなきよハあらず。

○よ部

よカラニマサツテ
 十四十一。一。之氣シゲキ許能麻欲コノマヨク云く。又十四。伊加保世欲イカホセヨク云
 云。又同。安素乃河泊良欲アソノカハラヨク云く。又十七。伊毛我多太手欲イモガタバテヨク十
 七十七。一。安我松原欲アガマツハラヨク十八二十。一。伊尔之敝欲イルニシハヨク又二十。和可
 礼之等吉欲レシトキヨク十九十三。一。遠始欲トホキシヨクとあるハ。カラと云意
 よて。木際キマタ従ヨリなどいふヨリ。全同トく。これ尋常の用様ヒな
 り。○十八十。一。許欲奈积和多礼コヨクナキワタレとあるハ。此間コノマタヲ鳴渡ナリワタレ

と云意なり。此用ハ許多ハなり。此ハ三井能上ニ從鳴渡遊久ク。
なといふ從ヨリ全同ト○五卷十九。久須利波牟用波云
云。十四十一。与曾尔見之欲波云くあるハ。藥ヲ飲
ニマサツテ。外デ見タニマサツテと云意なり。和礼欲利
母貧人乃。父母波飢寒良牟。などある欲利ヨリ全同ト。

よくクハシウ 子ンゴロ トクト トツクリ
一巻十六。淑人良跡吉見而好常言師芳野吉見与良人
四來三とあるハ。ムカシアツタ淑人ノ美地ヂヤトテ。ク
ハシウ見テ。ナルホド勝地ヂヤトイウタ。芳野ハコ、ゾ
トツクリト見ヤレ。大カタニ見スグスナ。カヘスぐモ

子ンゴロニ見ヤレ。今ノ良人ヨとる。六卷二十。難波ナニハ
方潮干乃奈凝委曲見名在家妹之待將問多米十卷十七
。朝戸出之君之儀乎曲不見而長春日乎戀八九良三
どある曲も。トクト。或ハトツクリと譯すべし。あや多し。
みあ此よ准べし。

よぐとち ヨナカスギ
十九十。夜具多知尔寢覺而居者河瀬尋情毛之奴尔鳴
知等理賀毛又同夜降而鳴河波知登里宇倍之許曾昔人
母之奴比來尔家礼。などある。夜具多知尔ハ。夜半スギニ
といふ意あり。夜降而ハ。夜半スギテといふ意あり。夜半

を絶頂と立て、それよ至るを、のびるといふ意よて、それ
過るを降つとをいふあり。

よこす ワルクチイフ

十二^四丁^四よ。人言之讒乎聞而玉梓之道毛不相常云吾妹と
あるを、惡口イフヲキイテ、と云意あり。

よごもり ヨゴミ ヨゴメ

十九^{十五}丁^{十五}よ。許能久礼罷四月之立者欲其母理尔鳴霍公
鳥云とあるハ、夜ゴメよて、曉方のまご明やらぬやど
をいへり。四卷^{四十}丁^{四十}よ。戀く而相有物乎月四有者夜波隱
良武須史羽蟻待とあるも、夜の末の残れるを云て同し。

三卷^{二十}丁^{二十}よ。棕橋乃山乎高可夜隠尔出来月乃光乏寸と
ある夜隠も、同意よて、夜深て出る月をいへるあり。

よー シカタ

四卷^{五十}丁^{五十}よ。早河之湍尔居鳥之縁乎奈弥念而有師吾兒
羽裳阿怜とあるハ、為方が無サニと云意あり。八卷^{五十}丁^{五十}

よ。松影乃浅茅之上乃白雪乎不令消將置吉者可聞奈吉

吉者の吉字舊とあるハ、イツマデモ消サズニ置ベキ為

本言は誤れり。方ハアルマイカ。と云意あり。伊勢物語よ。あゝねごもい
えよぞかふる色見えぬ。心を見せむよしのなけまばと
あるも、心ノウチヲゴランニ入ベキシカタガナケレバ。

と云意あり。

よゝゑやー ヨシヤ エイハ

二卷

十八よ。石見乃海角乃浦田乎。浦無等。人社見良目。酒

無等。人社見良目。能咲八師。浦者無友。縦畫屋師。酒者無鞆。

云く。とある能咲八ハ。假よ縦す辞よて。十分ナコトハナ

ケレドモヨシヤ。或ハエイハと云意あり。下の師ハ助辞

あり。

よまの 心ノヨセドコロ タヨリドコロ

三卷

九よ。白細之云く。吾妹子之入尔之山乎。因鹿跡叙

念。その反歌よ。打背見乃世之事尔在者。外尔見之山矣。耶

今者。因香跡思波牟。あどあるハ。心ノヨセドコロと云義

なり。又タヨリドコロとも聞べし。抑余須可ハ。所縁波可

なるべし。波可とハ。何處を波可と。あど云波可よて。慥よ

其處を指ていふ言あり。さてヨセハカを約れば。切サヨ

サカとなるを。サをスよ轉して。ヨスカといふるらむ。

故慥よ其處を所縁と心をよせ定むる意なり。十六

よ。志賀乃山。痛勿伐。荒雄良我。余須可乃山跡。見管將。偲と

あるも同し。常よ与須我と濁るハ誤なり。可ハ清音なり。

よそへ ワケガアル

八卷 五十よ。沫雪尔。所落開有梅花。君之許遣者。與曾倍互

牟可聞とあるハ。君がトコロへヤツテ見セタウハアレ
ドモ。君がトコロへヤツタラ。人が見テ。君トコチトニワ
ケガアルヤウニ。イヒナサウモシレヌ。との謂まり。十卷
六十_丁。梅花先開枝手折而者。裏常名付而。與副手六香聞。
十一_丁。二十_丁。争者。神毛惡為。縱咲八師。世副流君之。惡有莫
君尔。古今集俳諧題詞。從弟るりける男。およそへて。人
のいひけま。ばるどあるも同じ。

よそり ツキソヒ

四卷_丁十八。春日野之山邊道乎。與曾理無通之。君我不所
見許。吕香裳とあるハ。俗よ云。中間若黨ナドノツキソヒ

隨フ者ナウテ。一人通フタと云なるべし。十四_丁。比
登祢吕尔。伊波流毛能可良安乎。祢吕尔。伊佐欲布久母能。
余曾里都麻波母とある。余曾里も同言よて。ツキソウタ
ツマと云なるべし。

よなきかへらふ ナンベンモく夜鳴ヲスル

二卷_{九丁}。二十_丁。朝日照佐太乃岡邊尔。鳴鳥之夜鳴變布。此年
己吕乎とあるハ。ナンベンモく夜鳴ヲスルと云意な
る。

よのほと シヤウガイ

十二_丁。九_丁。世間尔。戀將繁跡不念者。君之手本乎。不枕夜毛

有寸とあるハ、ワシが生涯ノ間ニコレホドマデ戀シウ
思ハフトハオモハザツタレバと云意なり。

よのかぎり シヤウガイ

廿卷四十多知之奈布伎美我須我多乎和須礼受波與
能可藝里尔夜故非和多里奈無とあるハ生涯ニと云意
あり。

よのあひだ 生涯

十七三十之良奈美能與世久流多麻毛余能安比太母
都藝底民仁許武吉欲伎波麻備乎とあるハ生涯ニモと
云意なり。

よのほどろ 夜ノヒキアケ

四卷五十夜之穂杼呂吾出而來者吾妹子之念有四九
四面影二三湯とあるハ夜の分離よて俗ニ夜ノヒキア
ケノ頃と云意あり。穂杼呂と波那礼と音通ひて同言な
リ。集中雪歌ニ穂杼呂とも波太礼とも通しよめる。太ハ
那と又殊ニ親通へバ穂杼呂波太礼波奈礼ハ皆全同言
なり。さて夜の分離とも夜の明なむと臨る極を云其ハ
夜の最極のたまれなきバかくいへり。雪よ云るも分離
分離ニ零るを云なり。此言古來說く多あれども解得と
る人一人もあし。八卷三十秋田乃穂田乎鴈之鳴聞尔

夜之穂杼呂尔毛鳴渡可聞とあるも同一。

よばひ 夫婦ノヤクソク

九卷三十一。智奴壯士宇奈比壯士乃盧八燦須酒師競相
結婚ヨバヒ為家類時者云く十二八。他國尔結婚尔行而太刃
之緒毛未解者左夜曾明家流などあるハ夫婦ノ約束ス
ルと云ことあり。伊勢物語云昔男ありけり。女の得らま
じかりけるを年を経てよむひりりけるをからう
て盗み出ていと暮まにきにけり云く昔男大和ある
女を見てよむひてあひけり云くなど見えたり。言意ハ
本居氏呼より出たるならむ。今世の語云婦をよぶと云

も此るり。竹取物語云闇の夜もこゝかこより垣間
見まどひあへり。さる時よりなむよむひとと云けると
云るハ故コトナラ興コトナラ作りて云るなり。十三二十。夜延ヨバヒ為と
書るも正字ハあらびと云り。源氏物語玉葛云けさう
人ハ夜よかくれさるをこそよむひとハひひけまとあ
るハかの竹取物語を思ひて滑稽タハフレに。まざとをのく書
る。又もそのちと夜延ヨバヒの意と心得さるもあらむ。い
づれ本義も非るなり。高尚が伊勢物語新釋云夜にか
くまてをひりさるをいふが本なり。と解なせるも末小
つきて本をうらむひさるなり。

よひく マイバンク

十卷 六十丁 吾屋戸尔開有梅乎。月夜好美夕。今見君乎。社待也とあるハ。マイバンクといふことあり。

よむ カズヘル

四卷 十六丁 白妙乃袖解更而還來武月日乎數而往而來。猿尾とあるハ。月日ヲイツクト數計テといふことあり。十七 三十丁 月日餘美都追とあるも同ト。抑餘牟とハ。と呼と同言よて。幾箇くくと呼て算計るなり。七卷 九十丁 浪不數為而十一 二十丁 時守之。打鳴鼓數見者。十三 五十丁 吾睡夜等呼讀文將取鴨古事記上卷。皆列伏度尔。

吾踏其上走乍讀度など見ゆ。みな同ト。

よむ ドモル

四卷 五十丁 百年尔老舌出而與余牟友吾者不厭戀者益友とあるハ。年ヨリ齒ヌケ舌が出テ。詞ハドモルトモと云意なり。

より カラ ヲ ニ ヘ ニテ デ ニマ サツ テ

二卷 十九丁 石見乃也高角山之木際從我振袖乎妹見都良武香とあるハ。木際カラ妹が見ツラウカと云意なり。こそ尋常の用様よして。ととへむ。古より今。今より後。彼より此。此より彼。などやりよ云ること許多なり。具く論

ふ及フもムなるル一〇二卷十四。古イルニ戀コ流ル鳥トリ鴨カモ弓ユ絃ヅル葉ハ乃ノ三ミ井ヰ能ノ上ウ從ヨリ鳴ナリ渡ワタリ遊ユク久ク又又自サ雲クモ間マヨリ渡ワタリ相ソウ月ツキ乃ノ云ク十シ一イチ七シチ二ニ十ジュウ。從ケ折タ將ヨリ去カム又又三サン十ジュウ九ク丁テイ山ヤマ從ヨリ來キ世セ波ハ十ジュウ六ロク丁テイ七シチ。二ニ。櫛イ津ツ乃ノ檜ヒ橋シ從ヨ來リ許コ武ム云クなナどドあるル。こコれレらラハハ。三サン井ヰノノ上ウヲヲ鳴ナリ渡ワタリリリ行ユク又又雲クモ間マヲヲ渡ワタリルル月ツキノノとト云ク意イママてテ其キ餘ヨハハ准スへテ知チべシ。古コ事コト記キ。降ク出デ雲クモ國クニ之ノ肥ヒ川カハ上ウヘ。在ア鳥トリ髮ヘ地チ。此コノ時トキ箸シヤウ從ヨリ其キ河カハ流レ下シ。又又倭ヤマト建タテ命ノミ御ミコト詞ノト。吾ワカ心ココロ恒トキ念ニキ自ヨリ虛ソノ翔トビ行ユク。然シカ今イマ吾ワカ足タラシ不レ得ズ步ム。云ク。姓セイ氏シ錄ロク。佐サ伯ハク直チキ條ジョウ。于オノ時トキ青アヲ菜ナ葉エフ。自ヨリ岡オカ邊ヘ川カハ流レ下シ。天アメノ皇ミコ詔ミコトノ應オウケ。川カハ上ウヘ有アル人ヒト也ナリ。云ク。日ニッポ本ポ紀キ神カミ武ム天アメノ皇ミコ卷マク。二ニ。溯カハヨリ流レ而シテ上リ。仁ニ德トク天アメノ皇ミコ卷マク。二ニ。沂カハ江カハ古コノ今イマノ集ツク春ハル下ノ。清スガ原ハラ深コソ養ヤシ父チチ歌ウタのノ詞ノ書キタベ。山ヤマ川カハよリ

り花ハナの流ナリれレけレるルをヲ作ツクるル。源ゲン氏シ物モノ語ゴ須ス磨マ。たタきキよヨりリ船フネ等トのノうウとトひヒのノうウとトあアるルこコぎギゆユ。庭ニワ槐カヅ抄セウ。近チカ衛ヱ司シ等ト。或シテ自ヨリ氷カヒ渡ワタリ。或シテ過ス橋ハシ。なナどドあるルみミかカ同ト。〇四卷三十。八ハチ丁テイ。從ヨリ蘆アシ邊ヘ。滿ミツ來ク塩シホ乃ノ云ク。とトあるル從ヨリハハ。二ニ。よヨ。へヘもモ通スゆユるルなナりリ。此コノ從ヨリ許コト多クありリ。〇十一丁十七。山ヤマ科カ強ツヨク田タ山ヤマ馬ウマ雖シカ在ア步カチ吾ワカ來キ汝ナラ念オモヒ不レ得ズ。十ジュウ三サン五ゴ丁テイ。人ヒト都ツ末マタ乃ノ馬ウマ從ヨリ行ユク。尔ニ己オノ夫ツマ之ノ步カチ從ヨリ行ユク者バ云ク。なナどドあるルハハ。馬ウマニニテテ行ユク。步フミニニテテ行ユク。或シテハハ馬ウマデデイイクク。步フミデデイイククとト云ク意イママてテ通スゆユるルなナりリ。古コノ事コト記キ中ナカ卷マク。垂タラシ仁ニ天アメノ皇ミコ條ジョウ。光ヒカル海ウミ原ハラ。自ヨリ船フネ追オヒ來キ。下シタ卷マク。安ヤス康カサ天アメノ皇ミコ條ジョウ。倏タチ忽マダ之ノ間マ。自ヨリ馬ウマ往ユキ。雙フタ日ヒ本ホノ紀キ。應オウケ神カミ天アメノ皇ミコ卷マク。二ニ。浮ウキ船フネ。仁ニ德トク天アメノ皇ミコ卷マク。二ニ。浮ウキ江カハ幸サチ山ヤマ背セ。庭ニワ槐カヅ抄セウ。

此所自舟參着云く。推古天皇紀よ。送船 此れらみれ同ト
ことあり。○五卷二十丁。風雜云く。和礼欲利母貧人乃父
母波飢寒良牟云く。とあるハ。吾ニモマサツテ貧イ人ノ
云く。と云意あり。八卷三十丁。牽牛之念座良武從情見吾
辛苦夜之更降去者とあるハ。牽牛ニマサツテ云く。とい
ふ意あり。十五三十丁。比等余里波伊毛曾母安之伎故非
毛奈久安良末思毛能乎於毛波之米都追とあるハ。他ニ
ハマサツテ云くと云意あり。古今集よ。色よりも香こそ
あそれと思ふゆれ。誰が袖ふれ一宿の梅をもとあるも。
色ニモマサツテ云くといふ意あり。拾遺集よ。古ものお

アや志けむ吉野山。山より高きよそひまる人。とあるも。
山ニマサツテ云く。といふ意あり。又思ふより云ハたろ
うよ成ぬれば。とへて云む言の葉をなまきとあるも。思
フニマサツテ云く。といふ意よて同ト。○古今集よ。枕よ
り又知人もあき戀を。涙せきあへずもら一つる哉とあ
るハ。枕ヨリホカニ云く。といふ意なり。又思ふよりい
よせよとの秋風ふ。靡く淺茅の色ことになる。とあるも。
思フヨリホカニ云く。といふ意なり。万葉よハ見えねど。
古より。かやうよも用へるなるべし。此從も多し。
よるはすがら ヨドホシ

十三十四 丁 赤根刺畫者終尔野于玉之夜者須柄尔又十二
一丁 赤根刺日者之弥良尔烏玉之夜者酢辛二などあり夜
ドホシといふことなり。

よろふ ソナハル

一卷 丁 取与呂布天乃香具山云くとあるハ香具山の
形の具足りとるを称賜へるものよて峯谷よりをどめ
て石木に至るまであに一つあゆぬところなくとらひて
よくそろひとる謂よてソナハルといふことなり。

よろふあべ ツリ合ヨウ

一卷 三丁 耳無之青菅山者背友乃大御門尔宜名倍神

佐備立有云くとある名倍ハ並の謂よて打あひ宜く
満足ひとるより言起りて俗よツリ合ヨウといふこと
なりこの言三卷六卷十八卷などよも見えたり。

○ら部

らく ルコトガ ルコトハ ルコトラ ルコトヨ

二卷 八丁 菑刺日者雖照有烏玉之夜渡月之隱良久惜

毛とあるハカクレルコトガと云意なり七卷 三十九丁 塩

滿者入流磯之草有哉見良久少戀良久乃太寸とあるハ

ミルコトガと云意なり八卷 四十八丁 宇陀乃野之秋芽子

師弩藝鳴鹿毛妻尔戀樂苦我者不益とあるハコフルコ

トガといふ意なり。十三丁。天有哉。日月如吾思。有公之
日異。老落惜毛とあるハ。年ヨルコトガと云意なり。十卷
六十丁。一眼見之人。尔戀良久。天霧之零。來雪之可消。所念
十一丁。大海二立良武浪間將有公。二戀等九止時毛
梨などあるハ。コフルコトハ。或ハコフルヤウハと云意
あり。二卷四十丁。白妙之衣。塗漬而立留。吾尔語久。何鴨本
名言云く。九卷十八丁。世間之愚人。之吾妹兒。尔告而語久。
須臾者。家歸而云く。妹之答久。常世邊尔復變來而云く。あ
どあるハ。カタルヤウハ。イヘルヤウハと云意。よきこえ
と。り。十卷十四丁。如是有者。何如殖兼山振乃止時喪哭戀

良苦念者。六卷廿丁。御民吾生有驗。在天地之榮時。尔相樂
念者などあるハ。コフルコトヲ。アヘルコトヲと云意あ
り。十卷一丁。春霞多奈引田。居尔廬付而。秋田蒞左右。令
思良久とあるハ。シタハシメルコトヨと云意あり。十一
二十丁。足日木之山。田守翁置蚊火之下。粉枯耳余戀。居久
とあるハ。コヒヲルコトヨと云意なり。十二丁。石走
垂水之水能。早敷八師君。尔戀良久。吾情柄とあるハ。同ト
らくのルコトガ
七卷九丁。塩滿者。入流磯之草。有哉見良久。少戀良久。乃
太寸とあるハ。コフルコトガと云意あり。因ふ云む。古今

集。櫻花ちりかひくもれ老らくの來むといふなる道
まがふがふ。又老らくの來むと志りせば門さして、あ
ところへてあはざらまゝを、るど見えたる、らくのと云
るハ、同じ語路ながら、この古今なるハ、とい老といふこ
とを、老らくといへりときこそとり、かくて後くハ、又
此、古今集なるに本づきて、老らくと云ること多し。さて
万葉なる老良久ハ、見良久隱良久などの良久は同じく、
留の伸すところ詞よて、オユルコトガと云意なること、あ
らざるるをや、かくてその詞ハ、かの老良久惜毛の老良
久より、轉ひするものあれば、オユラク。とこそいふべき

雅言の定格なるを、わいらくと一むいへるハ、後よ唱を
さへ誤りするものあり。

らくは ルコトハ

十卷十四。吾瀬子尔吾戀良久者、奥山之馬醉花之今盛
有十一十四。吾背子尔吾戀良久者、夏草之荊除十方生
布如シクゴトシるどあるハ、コフルコトハと云意あり。

らくを ルコトヲ

四卷四十。村肝之情摧而如此、許余戀良苦乎、不知香安
類良武六卷二十。如是為管在久乎、好叙靈剋短命乎、長
欲為流ホリスルるどあるハ、コフルコトヲ、アルコトヲと云意なる

也。

らくも ルコトモ

七卷

四十丁。薦枕相卷之兒毛。在者社夜乃深良久毛。吾惜

責とあるハ。フケルコトモと云意なり。十二丁。夕去者。

於君將相跡念許増日之晚毛。悞有家礼とあるハ。クレル

コトモと云意あり。

らくに ルコトヂヤニ

八卷

四十丁。希將見人尔令見跡黄葉乎。手折曾我來師。雨

零久仁十卷。四十丁。秋山乎。謹人懸勿忘西其黄葉乃所思

君とあるハ。フルコトヂヤニ。オモハレルコトヂヤニ

と云意あり。きべて。かく。けく。さく。なく。はく。まく。らく。さ
どの類。みな同格。よ用く。辞。よて。譯言も大。の。同。ト。さま
あり。な。各。其。條。よ。い。へ。る。を。照。考。べ。し。

ら ソウナ テアツタ

一巻。八丁。朝獵尔。今立須良思。暮獵尔。今他田渚良之。云く。

とある。良之ハ。さごの。に。あ。り。と。ハ。知。れ。ね。ど。十。丁。七。八

と。そ。れ。ら。む。と。お。ち。ゆる。を。い。ふ。詞。よ。て。俗。よ。ソウナ。と

い。ふ。よ。あ。と。れ。り。有。之。成。之。な。ど。云。も。有。良。之。成。良。之。と。云

よ。同。ト。く。アル。ソウナ。ナル。ソウナ。と。云。よ。あ。と。れ。り。〇。二

卷。二十丁。暮去者。召賜良之。明來者。問賜良志とあるハ。召

セラレテアツタ。問セラレテアツタと云意なり。この良
志ハ、常云とハ異マて、過去一方のことをいふつゝの格比
詞なり。十八ニ十。美與之ヲ。奴能許コ。乃於保美夜尔ホミヤニ。安里我アリガ
欲比賣之ホメシタ。多麻布良之マフシラシ。毛能乃敷能モノフクノ。云々。廿卷ニ六十。於保
吉美乃都藝豆賣須良之キミノツギテメスラシタ。多加麻刀能努タカカマトノヌ。敝美流其等尔ヘミルゴトニチ。祢
能未之奈加由ノミシナカユ。これらみお同ト。

らむ○らめ

ラウ

アラウ

ヤラ

シラヌ

將取トラムと云ハトラウ。將渡ワシラムと云ハワタラウ。と俗ヨ云フ同
ト。一サ卷ニ。嗚呼ア兒コ乃ノ浦尔ウラニ。船乘フナノ為良武ラム。憾孀ヲトメ等之ガ。珠裳タマモ乃ノ
須十二スニ。四寶シホ三都ミツツ。良武ラム香カとあるハ。出帆シテイクラウ。女

房ノ裳裾モスツニ潮ガミチルラウカと云意あり○三卷三十
二。大汝オホナ少彦名チヒコナ乃將座志都ノイシゲムシツ乃石室者ノイハヤハ。幾代將經ヘタラムとあるハ。
幾代ヲ經タコトヤラ。或ハ幾代ヲ經タデアラウと云意
あり○四卷二十。山管ヤマスガ乃實不成事乎ノミナラヌコトヲ。吾尔所依オレニヨセ。言礼師イハレシ
君者キミハ。與孰可宿トカヌラム良牟ラムとあるハ。誰ト共ニ宿ルヅシラヌと
いふ意あり。ゾハ可カよあとり。シラヌハ良牟ラムよあとれり。
良米ラメも。許曾コソのかりの結びの異なるのみよて。譯言ハ
同ト。

①り、部

り

サニ

行卷乎保利と云ハ、行ウコトガホシイサニと云意あり。
戀為便無利と云ハ、戀シウ思フケレド、シカタガナイサ
ニと云意あり。

り〇れル

浦隱乎利など云ハ、ウラカクレテヲルと云意なり。乎利
等母と云ハ、ヲルトモと云意なり。妹不相安利など云
ハ、妹ニアハズニアルと云意なり。安利等母と云ハ、アル
トモと云意あり。礼といふも、許曾のか、其の結びの異な
るのみよて、譯言ハ同ト。

〇る部

るレ

待留と云ハ、マタレ流留と云ハ、ナガレと俗よ云よ
同ト。

る〇るレ

待留くと云ハ、マタレ流留くと云ハ、ナガレと俗よ
いふよ同ト。留礼といふも、許曾のか、其の結びの異あ
るのみよて、譯言ハ同ト。

〇れ部

れ〇れもレバニヤレバカシテ

有礼可と云ハ、アレバニヤ、或ハアレバカシテと云意あり

已戀礼可コフレバニヤと云ハコフレバニヤ或ハコフレバカシテと云意なり十三九オモヘカモシチヤスカラマコフレカモコロノイタキ念戸鴨胃不安戀列鴨心痛コフレカモコロノイタキとあるハコフレバニヤ或ハコフレバカシテ心カ痛イデアラウサテモマアナゲキと歎息ナゲキとるあり可母カモの母モハ歎息ナゲキ辞ママアと云意なりされバ可母カモと云ハ歎息ナゲキの意あるときにいふ詞マよて可カとのみ云よりハ委マき方あり心をつけて味べし

れむ レヨウ

將馴ナレハと云ハナレヨウ將隱カクレムと云ハカクレヨウと俗マ云マは同ト

れや レバニヤ レバカシテ

一巻十五打麻ウツソ乎麻續ラフニオホキミ王白水郎マナレヤイラゴガシマ有哉射等イラゴガシマ籠荷四間マ乃珠藻タマモ菊麻須キクマスとあるハ白水郎マデアレバニヤ或ハ白水郎マナレバカシテと云意なり

れり ○れる ○れ、 ツタ テラル

折有フレリと云ハヲツタマ或ハヲツテラルマ零有フレリと云ハヲツタマ或ハフツテラルマと云意なり礼留レル礼レくと云も上マのか、マによりて結マの異なるのみよて譯言ハ同トことあり

○わ部

わくらば ズンジヨラズ

五卷^{三十}。和久良婆尔比等^ハ波安流乎^云。九卷^{二十}。
人跡成事者^難乎。和久良婆尔成吾身者^云。などある
ハ。ヅンジヨラズと云意あり。古今集も。くらはよとふ
人あらば須磨の浦も。藻塩とれつゝ。ふと答へよとあ
るも同じ。

わけ ソコモト

四卷^{五十}。黒樹取草毛刈乍仕目利勤和氣登將譽十方
不在^ハ。八卷^{二十}。紀女郎贈大伴宿祢家持歌。戯奴^反云
之為吾手母須麻尔春野尔拔流茅花曾御食而肥座又^同
畫者咲夜者戀宿合歡木花君耳將見哉和氣佐倍尔見代

などある和氣ハ。みふ其許と云ことあり。さて右の八卷
。戯奴とあるもつきて。本居氏云。これハ家持卿へ贈る
歌なれば。賤しめて和氣とていふべくもあらぬを。あ
いへるも。とはむれなり。故戯奴と書て。とむれなるこ
とを顯せせるなり。戯奴の如しといやしめて云る意
なりといへるが如し。又四卷^{二十}。吾君者和氣乎波死
常念可毛相夜不相夜二走良武とあるハ。吾君の和氣と
のさまふ吾身をバ。死ねうしと思し。さまへバよやの意
にて。和氣の言ハ。一ツあり。さて又右の八卷。戯奴之為と
ある歌。家持卿の和へて。吾君尔戯奴者戀良思給有茅

花乎雖喫^{ハナ}弥瘦^{ハシ}尔夜須^ニとあるも、吾君の和氣^{ワケ}とのとまふ
我ハの意^イよて、これも和氣^{ワケ}ハ同言^{ドウゴン}あり。

わをれぐさ クワンザウ

三卷^三 二付^ニ香具^{カグ}山乃^{ヤマノ}故去^{コニ}之里^{サト}乎^ヲ不忘^{ワスレヌ}之為^ガ

四卷^四 二付^ニ草吾^{クサ}下紐^{シタ}尔^ニ著有^{ツケ}跡鬼^{ドシヨ}乃志^{ノシ}許^コ草事^{クサコト}二思^{ニシ}安^ア

利家^{リケ}理^リなどなちあり、今俗^{イマ}もクワンザウといふ草^{クサ}あり。

わところ 月日^{ツキヒ}ヲスギル

戀渡^{コイワタ}と云ハ、戀^{コイ}シウ思^{オモ}ウテ月日^{ツキヒ}ヲスギル、嘆渡^{ナギワタ}と云ハ、ト

イキラツイテ月日^{ツキヒ}ヲスギルといふことあり、他ハこれ
も准^{タメ}知^チべし。

わところを ワタラツシヤル

九卷^九 二級^ニ照片^{シヤ}足羽^{タテ}河之^{カハ}左丹^{サニ}塗^ヌ大橋^{オホハシ}之上^{ノヘ}從^ユ云^ク直^タ

獨^{トコ}伊渡^{イワタ}為^ス兒者^{コハ}云^クとある伊^イハをへ言^ハよて、渡^{ワタ}為^スハワタ

ラツシヤルと云意^イなり、兒^コハ娘子^{ニヤゴ}をさせり。

われどく ワカコトラシウ ジブンノコトラシウ

十九^{十九} 立別^{タチワ}君我^{キミガ}伊麻^{イマ}左婆^{サバ}之^シ奇島^{キシマ}能^ノ人者^{ヒトハ}和礼^{ワレ}自^ジ久^ク

伊波^{イハ}比底^{ヒテ}麻^マ多牟^{タム}とあるハ、御前^{ミマエ}ガ立^タワカレテ但馬^{タマ}へ御

下^{シタ}被^レ成^ルタラ、大和^{ヤマト}國^{クニ}ノ人^{ヒト}ハ、誰^{ナニ}モ誰^{ナニ}モ他人^{タニ}ノ事^{コト}トハ存^ゾセ

ズ、御前^{ミマエ}ヲ吾^ガ事^{コト}ラシウ、或^シハ自分^{ジブン}ノコト^{コト}ラシウ、イミキヨ

メテ、御^ミ還^{マエ}リ被^レ成^ルン日^ヒヲ待^マテ居^ルヤウといふ意^イなり。

あ、け ワツパク

五卷ニナ九丁九丁綿毛奈伎布可多衣乃美留乃其等和氣佐
我礼流可布能尾肩尔打懸云とあるハ。ワツパク
トタレサガツタと謂なり。芽子の歌。宇礼和良葉と
よめる和の言ハ。和可流和久和氣ふと活く言
よて。おつれ弊れとる良なるべし。空穂物語よ。かこびら
のりけとるを着てとあるも同ト。

あ、らば ワツパクトシタ葉

説上よ云とる如し。

○る部

るあ、り オキアカシ 井ザリアカシ

二卷ハ八丁八丁居明而君乎者將待奴婆珠乃吾黒髮尔霜者零
騰文とあるハ。起明イテ。或ハ井ザリアカイトと云意あ
り。集中よ多き詞あり。

るね ツレテ子ル ソヒ子

十六丁十六橘寺之長屋尔吾率宿之童女波奈理波髪上
都良武可とあるハ。ツレテ子タ。或ハソヒ子シタといふ
意なり。古事記穂く手見命御歌。意岐都登理加毛度久
斯麻迹和賀韋泥斯伊毛波和須礼士余能許登其登迹と
あるも同ト。

るむ 井ヨウ

將居將率井ヨウと云ハ井ヨウと俗井ヨウ云井ヨウ同ト。

○急部

急む ワラフ

七卷二十道邊之草深由利乃花咲尔咲之柄二妻常可
云也とある咲之ハワラハレタと云意なりニツコリト
ワラハレタバツカリノコトヂヤモウソレデヨイコチ
ノ女房ヂヤトイハレウカイとの謂なり畧解本居氏
の説を引て也ハと添るのみ此字あれバ結句をイ
フベシと訓べしといへるをいのよそや。

急む エヨウ

將殖ウエムと云ハウエヨウ將居スエムと云ハスエヨウと俗云云

同ト。

急らづくに ホク

十九四十ニ二豐宴見為今日者毛能乃布能八十伴雄能島
山尔安可流橘宇受尔指紐解放而千年保伎保伎吉等餘
毛之惠良惠尔仕奉乎見之貴左とあるハホクと咲
ふ負なり神代紀と嘘樂をエラクと訓字書と嘘同嘘嘘
雄畧天皇紀と歡喜盈懷をエラキマスと訓也續紀廿六
大嘗會豐明の詔小黒紀白紀能御酒乎赤丹乃保仁多末

倍ハエ惠ラキ良キ伎キ云ク。又卅卷詔ノも。黒ク紀キ白シロ紀キ乃ノ御ミ酒キ食タマ倍ハエ惠ラ良キ伎キ云クとありて。惠エ良ラ久ク惠エ良ラ良キ伎キなド活カ用ヨ一ニ云ル言ハと見ミえスり。

○を部

を モノヲ モノヂヤニ ヂヤニ

一ツ卷マ十三ノ下ニ。委ツ曲ラ毛カ見ミ管ツ行ム武ム雄シ數ク毛モ見ミ放サ武ム八ヤ万マ雄ラ云クことあるハ見ミナガラニ行ウモノヲハ行ウモノヲチヤ

ニ見ミ放サウシ山ナルモノヲ或ハ山ヂヤニと云フ意アリ。

をく マ子キヨセル

十七四十十下ニ。思シ放サ逸ユ鷹ト夢ユ見ミ作ス歌ク。呼フ久ク餘ヨ思シ乃ノ曾ソ許コ尔ニ奈ナ

家ケ礼レ婆バ云ク。とあるハ。ママ子子キキヨヨセセルル為シ方チガガナナケケレレババと謂フあり。十九二十下ニ。月ツ立タ之シ日ヒ欲ヨ里リ乎ラ伎キ都ツ追ツ敵ツ自シ努ヌ比ヒ麻マ低テ騰ド伎キ奈ナ可カ奴ヌ霍ホ公ホ鳥ト可カ毛モとある乎ラ伎キも同ト古コ事シ記キ上上卷マ天テン降カ條ジョウ。於ソ是ノ副ソ賜ト其カ遠ケン岐キ斯シ八ヤ尺サ勾マ璽タ鏡カ云ク而シテ詔シ者者云ク。これ天照大御神の天アメ比ヒ石イシ屋ヤ戸ド隱カ坐マ一ニとキまマねネきキよヨせセ奉ホウ一ニ璽シ鏡カを云フ。日本紀神代卷ニ風招フをカカガガヲヲキキとトよヨめメるルも同ト拾遺集ニ。一ニ之シをキきキ急キよヨせむムとトかカまマへヘとトるル云ク。とあるも招フ餌キなり。媒マ鳥トリを乎ラ登ト理リと云フも。招フ鳥トリの義ガあり。をソ○をソろろ ウソ

四卷^{丁四十}。相見者^{ハツキモヘナクニ}月毛不經^ニ爾戀^ハ云者^{ヲソロトアレヲ}乎曾^ハ呂登^ハ吾乎^ハ於^ハ毛保寒^ハ毳^ハとある^ハ呂ハ添^ハとる^ハ辞^ハよて^ハ虚言^ハあり^ハ。即今世^ハもウソといふ^ハも同^ハト。十四^ハ二十^ハも。可良^ハ湏^ハ等^ハ布^ハ於^ハ保乎^ハ曾^ハ杼^ハ里能^ハ麻^ハ左^ハ低^ハ尔^ハ毛^ハ伎^ハ麻^ハ左^ハ奴^ハ伎^ハ美^ハ乎^ハ許^ハ呂^ハ久^ハ等^ハ曾^ハ奈^ハ久^ハとある^ハ。大虚言^ハ鳥^ハあり^ハ。

をち アチ

十五^{丁卅}。己能^ハ許^ハ呂^ハ波^ハ古^ハ非^ハ都^ハ追^ハ母^ハ安^ハ良^ハ牟^ハ多^ハ麻^ハ久^ハ之^ハ氣^ハ安^ハ氣^ハ互^ハ乎^ハ知^ハ欲^ハ利^ハ須^ハ辨^ハ奈^ハ可^ハ流^ハ倍^ハ志^ハとある^ハ。夜明^ハテアチヨリと云む^ハが如^ハ。此歌^ハよて^ハハ乎^ハ知^ハハ以後^ハをさ^ハす貫^ハ之^ハ歌^ハも。昨日^ハより乎^ハ知^ハをバ志^ハらず^ハとよめる^ハ。昨日^ハヨリアチ

ヲバと云る^ハよて^ハ此^ハハ乎^ハ知^ハハ以前^ハをさ^ハせり^ハ。貞觀^ハ儀式^ハ十二月^ハ大儺^ハ儀^ハも云^ハく^ハ与^ハ里^ハ乎^ハ知^ハ能^ハ所^ハ乎^ハ奈^ハ牟^ハ多^ハ知^ハ疫^ハ鬼^ハ之^ハ住^ハ加^ハ登^ハ定^ハ賜^ハ比^ハ行^ハ賜^ハ互^ハ云^ハく^ハとある^ハ乎^ハ知^ハも同^ハ言^ハよて^ハ彼處^ハをさ^ハせる^ハあり^ハ。

をつ ワカバヘル モトヘモドル アトモドリスル

三卷^{丁三十}。吾盛^ハ復^ハ將^ハ變^ハ若^ハ八^ハ方^ハ殆^ハ寧^ハ樂^ハ京^ハ師^ハ乎^ハ不^ハ見^ハ歟^ハ將^ハ成^ハ四^ハ卷^ハ九^ハ丁^ハ。吾妹^ハ兒^ハ者^ハ常^ハ世^ハ國^ハ尔^ハ住^ハ家^ハ良^ハ思^ハ昔^ハ見^ハ從^ハ變^ハ若^ハ益^ハ爾^ハ家^ハ利^ハ五^ハ卷^ハ十^ハ八^ハ。和我^ハ佐^ハ可^ハ理^ハ伊^ハ多^ハ久^ハく^ハ多^ハ知^ハ奴^ハ久^ハ毛^ハ爾^ハ得^ハ夫^ハ久^ハ須^ハ利^ハ波^ハ武^ハ等^ハ母^ハ麻^ハ多^ハ遠^ハ知^ハ米^ハ也^ハ母^ハ又^ハ十九^ハ久^ハ毛^ハ爾^ハ得^ハ夫^ハ久^ハ須^ハ利^ハ波^ハ牟^ハ用^ハ波^ハ美^ハ也^ハ古^ハ弥^ハ婆^ハ伊^ハ夜^ハ之^ハ吉^ハ阿^ハ何^ハ微^ハ麻^ハ多

對へていふよハ乎都追とのみ云マ心を付べ。

をてもこのも アチウラコチウラ

十四^五丁^五。安^ア思^シ我^ガ良^ラ能^ノ乎^ヲ氏^モ毛^モ許^コ乃^ノ母^モ尔^ニ佐^サ須^ス和^ワ奈^ナ乃^ノ可^カ奈^ナ

流^ル麻^マ之^シ豆^ヅ美^ミ許^コ吕^ロ安^ア礼^レ比^ヒ毛^モ等^ト久^ク十^十七^七四^四十^十二^二。安^ア之^シ比^ヒ奇^キ能^ノ

乎^ヲ底^テ母^モ許^コ乃^ノ毛^モ尔^ニ等^ト奈^ナ美^ミ波^ハ里^リ母^モ利^リ弊^ヘ乎^ヲ須^ス惠^エ底^テ云^クるなど

あり。アチウラコチウラといふことあり。

をどこさび ワカ衆ブリ ワカ衆メキ

さ部さび條合考べ。

をとめさび 女郎メキ ジヨナメキ

上と同ト。

をぶよつらなめ 船ヲノリナラベ

十九^九丁^九。布^フ勢^セ乃^ノ海^{ウミ}尔^ニ小^コ船^{フネ}都^ツ良^ラ奈^ナ米^メとある奈^ナ米^メハ^ハ祢^ネの

伸^ノマ^マさる言^{コト}よて。小^コ船^{フネ}を連^{ツラ}ねと云^フるよて。船^{フネ}ヲノリナラ

べと云ことあり。

をらす ヲラツシヤル ゴザル

十^十卷^巻丁^八。除^ネ雪^{ユキ}而^{シテ}梅^{ウメ}莫^ク戀^ヒ足^ツ曳^ヒ之^ノ山^{ヤマ}片^{カタ}就^{ツキ}而^{シテ}家^{イハ}居^{ラス}為^ス流^{リウ}君^{キミ}と

あるハ家^{イハ}ヲ造^ツツテヲラツシヤル君^{キミ}或^シハゴザル君^{キミ}と云

意あり。

をりあかー 井ザリアカシ

十八^八丁^三。乎^ヲ里^リ安^ア加^カ之^シ許^コ余^ヨ比^ヒ波^ハ能^ノ麻^マ牟^ム保^ホ登^ト等^ト藝^ギ須^ス安^ア

氣牟安之多波奈伎和多良牟曾とあるハ、宿モセズ井ガ
リアカイテと云意あり。

を、る ワツバクトシタ

六卷 十三。春部者、花咲乎、遠里、秋去者、霧立渡云く。又
四、春去者、岡邊裳繁尔、巖者、花開乎、呼理云く。又
下、耀錦成花、咲乎、呼理云く。九卷
乎、烏流、櫻花者、云く。又、射行相乃、坂上之、踏本尔、開乎
烏流、櫻花乎、令見兒毛、欲得、十三
里、秋付者、丹之、穗尔、黄色云く。などある、咲乎、烏流ハ、花の
繁く盛る、咲乱て、靡ける、良を云る、よて、俗よ、ワツバクト

シタと云意よきこへとり、六卷 三十。春去者、乎、呼理尔
乎、呼里、鸞之、鳴、吾、島曾、不息、通為とあるも、花といふこと
を、あけまども、乎、呼理尔、乎、呼里と云よ、花なるよしをも
よせて、志あきあせよるものよて、全、同意なり。又、二卷 十三
二、打橋生乎、烏礼流、川藻毛、叙干者、波由流、云くとある
も、川藻の繁く盛る、生、乱れて、彼方、此方よ、靡ける、貌を云
る、よて、同言あり。

上、件よ、もれよる、古言、あるハ、ときあやまてり、と、たか
しき、ぬし、の、ある、をも、續編と名づけて、つぎよ、出すべ

1.
にほよそ時よあひ花やうぬる人も思ひやりあふらず
―て世よ志のちるべきや―をな―おのぎ―てふれあ
をなすらむ後よかこりもほこみほきいらふけの―つ
きはむきみやのよらそぎよま名をとらむとかまへて
があるまどと思ふきぢれごとをひとおもてよいとめは
らそふときい大のこの世よそねまれ人のうらみをおひ
てはてしなきこころひてお人のまにせぬやうよあり
もてゆきてそのいぢきをまぬらがこきものぞう―世中
のよろづれごと何のなきらぬぢみつくろ歌よむまづ
れ事も物よなきあらそ―たきて後のこめとあらづく

ついでにうしろをたのむやうにうしろを見つゝ
のさざめきのあひだにうしろをうしろにうしろにうしろ
ひてまゝにうしろにうしろにうしろにうしろにうしろに
うしろにうしろにうしろにうしろにうしろにうしろに
よをやくにうしろにうしろにうしろにうしろにうしろに
カッをしうにうしろにうしろにうしろにうしろにうしろに
よ去年の冬ゆくりなく妻ようのれにうしろにうしろに
をけうものよておほやけごとのいとまにを老るる父を
さねき子どもをやくにうしろにうしろにうしろにうしろに
りぬるをよとより家まづにうしろにうしろにうしろにうしろに

だよるけれど手づから菜つみ水くみるごとく月日をう
とるよ今にうしろを見筆とるごとのいとまのけらにある
べくもなす志のはあれどもうしろにうしろにうしろにうしろに
うしろにうしろにうしろにうしろにうしろにうしろに
うしろにうしろにうしろにうしろにうしろにうしろに
あつてもうしろにうしろにうしろにうしろにうしろに
の事やうまのうしろにうしろにうしろにうしろにうしろに
ゆみさうのうしろにうしろにうしろにうしろにうしろに
も見さやうにおおゆれば今をいとまにうしろにうしろに
うしろにうしろにうしろにうしろにうしろにうしろに

な—あが、人をあらぬ、ありがよひつゝ見む魂のりのに
おいなく、口を—ちよのよ思さま—いでや、さのいしん
ころが—れゆびな、ちたどを、あつづよ、いまよ見よ
ろこびてよと、それをせめての、かみ—てほろ—まえぬ
傍の、—ひを、又、ちうらに、あひ、おこ—てよ、あふ、あかつき
を、いさ、げら、い、いの、い、ぬ、傍、まほ、どを、ね、い、ど、て、ち、や
く、より、お、ま、ち、—た、ま、し、る、何、くれの、巻、この、下、の、ち、を、や
り、いで、い、その、中、よ、この、書、—も、う、ひ、ま、る、びの、ち、も、が
らの、い、め、よ、と、て、み—ま、は、の、玉、江、の、こ、も、を、か、い、よ、も、の—
て、あ、ち、た、の、に、書、ま、い、し、る、こと、の、み、ぬ—あ、れ、が、ち、り、ほ、い

う、せ、な、む、も、な、さ、ふ、こ、も、の、は、と、お、ゆ、め、を、お、り、い、ち、て、そ、こ
の、心、れ、あ、の、ま、を、ま、ら、み、を、あ、ら、う、く、ち、い、よ、つ、よ、う、これ、を、お
きて、何、の、い、有、べ、ま、ま、づ、この、書、を、こ、そ、と、い、れ、よ、も、の、さ、み
ふ、ろ、り、み、ろ、り、ぶ、ら、ま、い、み、か、さ、ひ、あ、む、う、ず、か、よ、ひ、ま、て、
い、い、で、く、と、そ、い、は、の、ち、ら、い、こと、の、切、あ、ら、に、よ、り、て、こ、い
び、か、ま、あ、ら、う、こ、め、物—つ、よ、ち、む、な、ち、あ、ら、—卷、この
お、ひ、ま、づ、ひ、よ、い、い、づ、ま、も、れ、せ、む、哉、

天保八年丁酉八月十四日

藤原雅澄識

同 明治廿六年十一月廿八日印刷
廿六年十二月一日發行

宮内省藏版

印刷人

吉川半七

京橋區南傳馬町
壹丁目十二番地

